

# 方 向

## 十 一

\* 杉 水 秀 太 郎 \*

アラン 音楽家訪問  
— ベートーヴェンのヴァイオリンソナタ —

\* 中 新 敬 \*

依然 神 福 玉 抄 (二) 遺 領  
— 「北条貞時十三年忌供養記」の資料価値をめぐって —

\* 原 田 慶 \*

詩 33 篇

\* 原 田 寛 雄 \*

詩 13 篇  
寒 伊 東 小 山 詩 (二)  
塚 齋 静 雄 私 記  
後 (一)

音楽家訪問

ベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ

ア  
杉本秀太郎 訳

プロローグ

われわれの前に小さな鉄門が開かれたとき、まず私が見たのは、薪割りをしている赤毛の男であった。かれは手斧にもたれていた。流れすぎた十年の年月と外的行為の痕跡とをかれの上から削ぎ落したとき、私はたちまちそこに旧知の友たる音楽家のがっしりした顔を見出したのである。かれの方でもまた、年月を私の上から削ぎ落すや、微笑をうかべ、青春時代の姿をそのままよみがえらせた。私は、陽に灼けた、百姓のようなかれの両手にまで視線を走らせたが、その手には昔ながらの力がすこしも衰えることなく生きているのが、すぐわかった。かれは、この声なき言語にこたえ、人間機械には決して真似できぬあの思考の速やかさそのままに、休息から運動に移った。一本の生木を黄色の断片に二分し、とび散らせておいて、かれはわれわれの方に歩み寄った。こういいながら、「ほかでもない君の美学的夢想を考えていた日から、また二日と経っていない。現実なるものはあされるほど寓意的である」と昔君から聞かされたかかったらうか。「君にそういわれると、私はかれにいった。」「かつて長いあいだ、私のしきりに氣に



していた、ある定式が思い出される。その定式からは何らの光明も引き出さずにおわつてしまったが。ところで、ここに居るのは姫のクリスチーナ。かの女は空腹と喉のかわきに今にも参りそうなのだよ。

こういうわけで、われわれはレンガ造りの小さい城に入つたのである。待つほどもなく、食べ物に報いられた。食卓の指図をした婦人は、オペラの女王にある通りの大柄を、イタリヤ人的な体格の、そして動物的な純真さをそなえたひとであつた。まだいくつもの語らぬうちに、一切は説き明がされてしまつた。どういふわけで、臨時兵士の私が、砲声の今なお震動させている、このアルゴンヌの森林などに、姫のクリスチーナを引つ張りまわしていたが、<sup>(1)</sup> どういふわけで、この巡礼の旅が、音楽に倦み疲れたから、四年間というも、ただ押し黙つて憤激に身をゆだねてきた一少女に、均衡を取り戻させたか。もとより旧友の仲ならだれしもこうしたことがらを、まず話さねばならぬ。だが、ここでは、およそ話しことばなどは役に立たなかつた。私はもう氣づいていたので、友の譜面台の上には、リリヨリの森が<sup>(2)</sup> 拵が、ついたのである。そしてこの小さな本は、私が今では、おぼや踏みこえようと、思わぬ一線を劃している。偶然に負う邂逅、しかもパリ時代の友愛のきずなを固く結び直したこの邂逅は、かようにして、すばらしい十日のあいだに、多くのいやな思い出と多くの空しい怒りをすつかりなため、私に音楽と平和を返してくれた。わが友もわが姪も、またこの恩寵を待っていたのである。それは、憎悪にたいしてのみ怒りを感じた人間には、まさに当然来なくてはならぬ恩寵なのだ。

ら。してみれば われわれには 戦争というこの悲劇的題目をだま、て見すごしにして  
いたければならぬわけなど決してあろうはずがないのだから、われわれはもはや戦争の  
ことなど考えなかつた。しかし、時間の外なるこの平和 考へのこの自由な述べ合い  
この解放されたハーモニー、これらは 決断を降したことなく判断を行使したことない  
ような人々には、まことに縁どおいものである。そういう人々には かれらめいめいの  
思想が、うるさくわすらわしいにちがいない。だからかれらはこの著作を盛賞すること  
であらう。だが、事實はまさに今述べた通りなのだ。

われわれの眞の快樂というものはすべて、解き放たれた思考、そして故意の言い落し  
のなされぬ思考を、予想するものである。それにまた、美しい対象こそ最も良き対象だ  
ということもある。なぜならば、美しい対象はすでに一致を先取りしており、しかも直  
接的感情の共有によつて、差異に拠りどころを奪えぬからである。音楽が およそ  
どんな聲響にしかかかりのない真剣さによつて人を樂しませる、ということを考えに入  
れぬとしても 音楽というものは、おそろく他のいかなる対象にもまして一そう強く、  
かような直接的感情をいや感なしに強いるものであるから、人々が詳なして大音楽会に  
押しかけ 眞の平和を味わおうとしたと聞かされても、私はさほどおどろきはしない。  
だが氣をつけたまへ。自今自身の思想から逃れ切ろうとすれば、外的な財宝をむさぼ  
り樂しむほかなくなるはずだから。戦争を言訣けにするつもりなら、どんなことでも  
できる。戦争を指導することさえできる、しかも罪に問われることなしに、このことは、



多数の良心が少しもためらうことなしに心得ているところである。だが、戦争を承認することはできない。戦争を正当化しようとする理屈がもっともしくければそれだけ一そう思想は墜落する。あの何の役に立たぬ卑怯によつて、醜いものはいつまでか生きたからえる。しかもいよいよいちばん奥深いところで、一たん心の底に裏切りが果たされるとそのときから、これはや安らかな一切の表情に見捨てられ、とり乱し、とまどつたあんなに多くの類の上に、衾が寒にはつきりと醜いものを見ることになるのは、こういうわけからである。恐怖に屈服した身体には、もはや思い切つた運動ができなくなる。と同様に、一たん暴力に屈服した思想は、もはや判断するすべをわきまえぬまでになる。真なるものを拒否する人は、美なるものを拒否していることから、すぐさま見分けがつくのである。なぜなら、美はいつても、われわれの最初の確信であり、また直接的な判断の唯一の対象であるから。だから刑罰が降るのだ。しかも軽減の望めない刑罰。けれど、人がしかめ面をしたとすれば、それは、しかめ面をしたいと思ひ、そうしようとする人が誓つたからなのである。今私は、扱はれた類を、はるばる遠くまで求めにゆこうとしている。いかにも。だがそれはやむを得ない。

## 第二章 二長調

ミッシェルは、愛蔵しているプレイエル製グランドピアノの扉を開いた。よくひびく一室。寤は真晝の外気をかよわせている。かれはペン先で弦を軽くひ、かいて歌わせ、ピアノの調子を自分で確かめた。「そら、この弦の音だ」かれはいった。「このピアノというメカニックな楽器で出せる純化された音といえは、せいぜいこんなところにつきない。ピアノのハンマーは雑音をこさえるだけだろ」そしてクリスチー又にもむかっただかれはこういった。「その雑音を抑制するのが君の役である。その雑音を克服するのが僕の役である」。

人間の身体と人間の指からひき離されて横たわっているグランドピアノというこの大ハーブを、友愛の情を覚えずして眺めたことは、私にはかつてなかつた。この大ハーブから出る音楽は、創造的な指の運動をほとんど留めていないであろう。いかに鍵盤は精神に充ちており、だからこそ、ベートトヴエンが「んほ」であつたことが私にはよくわかる。しかしながらピアノを叩く手になるほど、いかに強そうにみえはしても、手はこのはよい、音にたいしてただまったく想像上の一王国の権力しか振るい得ないのである。たしかに、手はリズムに反応し、また休止と時間と音の強度とによつて、音を規制しはするが、それは、手が音に触れている、ということでは決してない。ハンマーが投げ降される。そのとき、もしも足が、弦のすぐそばで、手よりも軽やかな接触、しかし手よりもなお直接的な接触を、ペダルを介して保つていなくなつたならば、すべては、ただ音のこもる、心情を缺いた小宇宙内の出来ごとでしかなくなる。足のことを、ここで思つて



みる人はまあいいだろう。だが音楽家は、考え、そして耳を傾け、手をあややかに足と合致させつつ、足にすべてを托するのである。軽快な足、ことづけを運ぶ使者よ。もしそうでないなら、だれが信じるだろう、精神にだけは敏感に反応してくる手というものの意図するところにしたが、い、すばやく、しかもすばや過ぎることなく音を追い、音を鎮める力量が、ただ両足にだけそなわっていることを。人間的芸術の進歩が、身体の有するあらゆる表現手段を、ついにピアノによって衆目に曝すにいたったことは、おどろくべきことである。そうはいって、走り、ためらい、大地を打ち叩き、しかも釣合いを取った身体がどんなにわずか傾いても、たちまちその傾きを敏感に受けとめるこの足というものが、ピアノという機械を通じて音という取り返しのつかぬものの打ち出され、てしまうのに先立ち、カーブをふみ出すやただちにこうして音を追いかけるとして、これの方はすこしもふしぎではないのである。

ミッシェルが椅子の配置をととのえ、ヴァイオリンを合わせているふいだ、わたしはこつたことを、大そう大胆に考えていたのであった。そしてここに坐っているのは、ミッシェルはいった、一実にお喋り好きで先生なのだ。もう早速何が言いたそうにして、いるじゃないか。しかしこれから、ベートーヴェンのピアノとヴァイオリンのためのソナタ、カーブを演奏することにかからねばならない。クリスチーヌ、このソナタに思いきってとびかかる気はないかな。ぼくはいつでもはじめられるよ。

当年と、十六才のクリスチーヌは、まだ少女の顔立ちをとどめている。手は頑丈な

うだが、少々赤い。だが、五才のとき、はじめてピアノを一台ゆすり受けたかの女がそのとき示した光景には、オデに並々ならぬところがあつたものである。だからこのときもやはり、クリスチー又はもう今にも弾き出しそうにした。ミッシェルはこれに力を得て、まるで手筈を握るようにしてヴァイオリンの棹をひつつかんだ。とみるや早くも、ふたりは弾きはじめたのである。音を言語に訳出することはできない。私はただこう言つておこう——ミッシェルは、今から二十年昔のこと、かれがヨーロッパ征覇を企んでいた時分に私が聞いた、あの媚びるような音を、もはや持つていなかつたと。音楽は、こうして今ではむき出しになつてゐた。そしてヴァイオリニストたちがモーツァルトのちかに見出してあんなに恐れをなしてゐるものを、かれはベイトーヴェンのなかにも兜出してゐたのである。クリスチーの方はどうだつたか。かの女は、物語り手たるヴァイオリンの歩み進むその前方に、光りまぶしい絨繡を延べ拵げていつた。

演奏が終つたとき、ミッシェルはいつた、「クリスチーヌ、君は節度といふことを忘れずにいたら、いくらでも進歩するだろう。」

「節度とは、私はいつた、「筋肉のある状態のことであつて、人が自己について作り上げるやに、いゝ意見などではない。」

「いかにいゝとミッシェルはいつた。「だがしかし、かれは言い加えた、「クリスチーヌにむかつて、今さらおさらい臭いことを言ひ出す必要はないらしいことが、ぼくにはわかつたよ。教えられて習いおぼえるようなことなら、かの女はすべて心得ている。」



のだから。そこに芸術というものの限界がある。

「いやいや、私はいつた、」芸術はそこからはじまる、というべきだろう。

「君はあい変らずの人だ」とミッシェルがいった、「つまり、無学ものに物を教えるという教師の習性を、君はまだなくしていないね。」

対話は、体を休める必要から一おう切り上げられ、われわれは散歩に出た。しかし、夕暮になったとき、われわれはまた部屋に戻り、膝の上にこのソナタ第一番の楽譜を開いた。「ニ長調」ミッシェルがいった、「このソナタ第一番が、なぜニ長調で作られているか、これを解かなくてはなるまい。だがその前にまず、ニ長調とはそれ何物であるか、これを知らねばならない。それから私にむかってかれはこういった、「往年の君は、知らぬことなした、たね。」

「その後またさらに多くを学び知ったよ」と私はかれにいった。「音楽家ならだれでも知っているように、音楽は移調されるとかならず多くのものを失ってしまうものである。私が知り合いになつたなかから出来る音楽家が、あるときホ長調でピアノ幻想曲を作つた。それは楽しい曲だったが、しかしかれにそう言つてやつた通り、実際かれはホ長調ではなかつた。言われて、かれも気がついて、それを認めた。つまり、かれが作曲したホテルのピアノは、むしろ音が低くなつていた、というわけだ。」

「その運勢だめしからわかることは、その音楽家の耳は、かれの目をまったく信じていなかった、ということだ。それなら、かれの未来は上々吉ではないか、だが一体君は、

そこからどういふことを引き出したのだろう。音楽家たちは、この逸話にふいて答められてゐるのか。

「音楽家なら、こんなことがあつてはならないのだ。私はいつた。「なぜ答めねばならぬのか。私は説明してもいい。しかし、別のひとつの論の方を、ここでよく考えてみたい。これの方が都合がよい。調性は、ハ調から始め、ふた通りのやり方で転調を重ねてゆけば、いくつも差み出されるのである。さあ、このことをいつくり眺めようではないか。」

「そうだとすれば、これはいつた、「ふた通りのやり方があるわけだ。だが、ぼくはそのひとつのやり方しかわからない。わからぬといつたのは、根本的な説明ができない」という意味であるが。つまりぼくに説明できるのはその一方のやり方だけだ。君はあ、ぼえ、というだろうが、音われわれは鍵盤のハの音だけを叩き、他のいく本かの弦が共鳴して鳴り出すのを聞いて痛快がついたものだ。そして、わめきがおさまろうとするその瞬間に、変口の音があ、の倍音のなかに隠れひそんでゐるのを、耳ざとく聞きわけることさえしてゐた。つまりわれわれは、そのとき、ハ調の方にむかつて引き降されてゐたわけである。ハ調から変口調に、変ホ調に、さらに、つぎの調にと辿つてゆき、われわれはどうとう鍵盤をひとめぐりしたものだ。このやり方ですれば、二長調はイ長調のつぎに来るはずだろう。」

これはあまりに念入りな廻り道である。私がハ長調と二長調をつなぐやり方は、明



らかへこれとはちがうのであつて、ハ調からト調に、そしてト調から二調に、という二回の転調だけで私の目的は十分に果される。これは、ミツシエルの述べたのが下落してゆく転調であるのと逆に、二回とも上へ上つてゆく転調である。

そしてここには、調性の自然的傾斜に逆らうある努力があるのだ。私に付それがけつさり感じられる。

「ミツシエル」私はいつた、「もしも人間が、調性のこの自然的傾斜に身をゆたわてしまえば、もはや音楽も、声音も、そこには絶対があり得ず、ただ叫び声しかあり得ないことに存るだろう。思うに、どんを声音でも、その本来の性質からしてかならず変化してしまふものである。こうして、どんを長調の歌でも、きつと短調に転落する。短調の歌は、かならず無細工な歎きの歌に、そして歎きの歌はかならずうめき声にと転落してしまふものである。若い時分には、こんなことに思い当れようわけがなかつた。なぜなら、若々しい自然は、歎きの歌やうめき声に振えられることなどないからだ。音楽のなかには、殊にわれわれの音楽、西洋の近代音楽のなかには、意志があるということに思い当るのに、私は二十年もかかつた。

「してみると」ミツシエルがいつた、「音楽とは、意志と自然との闘いだ、ということになるだろう。これはなかなかみごとなドイツ的テーマではないか。」

「私は、われらが祖国フランスを賞揚するいいき論者の仲間を軽蔑するつもりでは毛頭ない。だが」と私はいつた、「要するにわがフランス精神なるものは、實際いつて、

ま、たく音楽家に向いていない、私は、あえてドイツ風にこう言いたい、二長期で歌う人は、それだけですでに二度まで自然を征服した人である。

「いかにも」かれはいった、「その人は、苦痛、おきらめ、奴隷状態、これらを二度まで否定した人である。」

私はさらに言い加えた、「出発点となる八調は、均衡した、あくまで単純な調性であり、規律ある受容というべきものだ。思うに、最も自然な調性が、あるさま、た高さに固定されているのは偶然ではないのであって、すべての人間に共通している身体的構造に無関係とはいえないだろう。普通の人が普通の状態で歌を歌うとき、それは八調になる。だが、今かりに、歌が八調で歌われることがま、たくないとすれば、そのとき、の八調以外の調への移行には、かならず何らかの意味があるのだ。ミツシエル、このヴァイオリソンナタ集十曲のなかには、とにかく、八長調という調がひとつとして見当らないのだよ。」

「それはつまりミツシエルはいった、「ピアノとヴァイオリンのためのソナタというものが、何か本質的な開きを秘めているからではなからうか。この形而上学は、ぼくをうーとりさせる。しかしまあ、こいつけはやめておこう。われわれは二度まで自然を征服した、そして今や二長調にいるわけである。」

「二度まで」私はかれにいった、「だが、同じやり方を二度くり返してではない。われわれがカブクで物をこころみようとするとき、最初われわれに手を添えるもの、そ

れはかならずわれわれの持ち前の性徳である。それゆゑ最初の勝利には、まったく反者が欠けている。ト調が表象してゐるのは、つまりこのことである。ト調は、われわれすべてのはじまりがさうであるように、子供である。だが、ニ調という調は、反省、準備、確信によつて、もうはやくも成年にまで成長してゐる。イ調となると、私はそこにすてに、あの幸福な習慣を聞き取る。人間というこの精妙な自然物は、もはや大胆なことにあえて手を下すすべをわきまえなくなつてゐる、といえよう。ところが、反者がなおこのことにまで及ぶと、ついにわれわれはホ調に連れ去られてしまふのだ。ホ調、これはオリンポス神の調である。英智などなくて済ませるあのゼウスの調なのである。

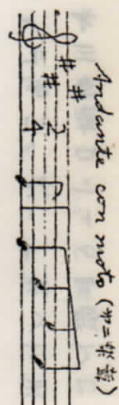
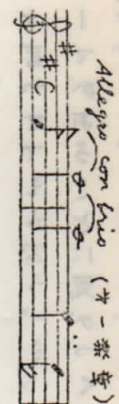
「昔われわれはヘーゲルを読んでいた。ミッシェルがいった、ヘーゲルを読みながら、ぼくは、どういふわけか、変記号のつく調性をいろいろ考えさせられた。今こそわかつたが、ヘーゲルは、ホ調、いやおそらくはさらに口調で鳴る弁証法的な楽曲だったのだ。これら嬰記号のついた調が、考えの述べ合いにおいて許されるかどうか、これはまだ何ともいえない。しかし、とかかれは楽しそうにいった。『すべては許されている。』

「作品に近づくことなしに、よいか、だれも皆めいめい、言いたいことを持つていた。『私は、調のことだけをいふことにしよう。』とまず私をはじめた、このソナタの才一楽章と終楽章とのふたつは、どちらも調はニ長調だが、ニ長調から一長調まで一たん下降してからふたたび原調まで上りかえりてくる、という点で注目すべきものである。しかしその推移には、わざとら



しいところが多く、つなぎ方は自然を感じがする。調性間の近親関係の何か法則らしいものを、このつなぎ方は暗示している。といつてもよい。私の考えでは、二長調というものは意欲であり、男らしさであり、自信に充ちあふれた青春であるから、二長調とへ長調とは、実際にはそんなに遠くへだたてていない、ということになる。私の弁証法的な夢想からすれば、へ長調には、はじめたばかりの恋愛の歩みぶりがうかがわれる。芽ばえた恋愛というよりも、はじめの奴隷状態、といつた方がよか、たかもしれないが。二短調となれば、これは、悲ごろの初期のたわむれのままに、いきなりそこまで落ちたへ長調にほかならない。しかし、われわれのように五十を越した人間には、二短調からへ長調まで上りかえすことなど期待してくれるむとも、まずあるまい。オー楽章では、この転落は優美なものであり、第三楽章では、性急で猛烈なものである。調について、なお一言。オニ楽章アンタンテは、百姓的自由にまで高まってゆく。そしてついに異教的なものにまで触れている。要するに、百姓的 (populär) も、異教的 (religiös) も、語源けむとつなのだから。オニ楽章中の短調のヴァリエーションは、さらに別のもうひとつの転落を示している。作品の構造に呼応した転落。あとのことは、きみたちの観察を待つことにしたい。

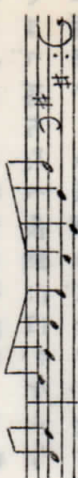
つではぼくは、テーマについて言わせてもらうおう。ミッシェルがい、た、つぼくは三つの楽章いずれにも、上昇的テーマがあることに気がつく。オニ楽章ロンドの冒頭では特にはっきりわかるが、他の楽章でもすべて明らかである――



しかし第一楽章のつぎの箇所、ここではテーマが、逆に近い方の音に結びつけられて  
いる——



執拗に下降してかくこのデッサンのなかに、もうひとつのこのモチーフを認めないで  
いることは不可能だろう——



このモチーフは、まずはじめにピアノというメカニクな楽器によって、低い音域で提  
示される。そのあいだ、ヴァイオリンの方は、先にいったもうひとつのモチーフの方を  
確定づけている。あの上昇的テーマ、ほくはそれを意志的なテーマと呼びたい。そして  
それを対比させる意味で、ヴァイオリンがピアノのあとを受けてくり返して奏するあの音  
階的テーマの方を、自然的テーマと呼びたい。全体がほとんどメロディで充たされたこ  
の第一楽章の完全無欠々に、ほくは感嘆を惜しまない。見たまえ、ピアノとヴァイオリ  
ンが音階を交換し合ってたわむれているうちに、ふたつのテーマがいかにみごとに融け

合うか——



これはもうすでにオニ祭章ロンドを思わせるではないか。オニ祭章アンダンテのオーテーマは、実ははっきりと、意志的なものである。オニテーマは、ぼくの解する限り、自然的であり、かつ第一テーマを補足しているものである。だが、そう言い切ってしまうつもりはない。たとえば、このオニテーマが、通りすがりに二長調を掴える個所を見ると、そう言い切れないことがある。さて、オニ祭章ロンド。これは意志的であると同時にメカニックでもある。すべてロンドというものはそうしたものだが。ハ調の恋ごころを抱いたテーマは、ややしばらくは動きに抵抗するが、結局は動きに投えられてしまう。次の譜面にみるような風に宥和し合う楽句によって、曲の最後を飾るこの物語は、ぼくをいっもおどろかせたものである——

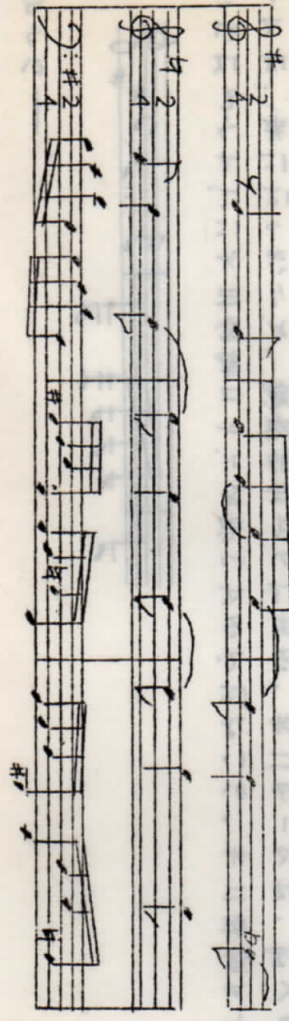


ぼくはここに、ソナタのどんな終楽章にもある夕暮れの色合いを見る。しかしそれも物思いの一瞬間にすぎないのだ。二調が、ピアノのメカニックな力によって、二度立て直



される。そしてそれが仕上げだ。うたがわしいところはない。手当の終りとなるような終り、これはなかなが大したことだ。さあ、つぎはクリスチーヌさんが何んと言いたまえ。「わたしはテーマのないヴァリエーションが好きです」とかの女はいつた。「オソソナクにも同じような奇蹟がありますね。テーマというものはこんなときに、つまり、もはやテーマがなくなつたときに、最もすばらしく歌うものなのです」

「クリスチーヌさん、君はアラン先生にたっぷり月謝を払いたまえよ」ミッシェルはいつた。「まったく君は、みごと左指摘をしたものだ。思うに、テーマはそこにありながら、リズム、それから書き方のために、それは少くともかき消されている。そしてこういうヴァリエーションは、まさにそのように演奏すべきものである。また、たしかにこのオニ楽章のオソソナクヴァリエーションの眞理は、オソソナクのヴァリエーションのなかにも見出される——」



ところでこれらふたつの例は、音楽において起るあるおどろくべきものを、ぼくに突然さとりせてくれる。だが、わがアラン先生は、何か言いたくてむずむずしているように見受ける。

「私はただ、プラトンにあの世からおいでわがいたいと思っただけにすぎない」と私  
はかれにい、た。プラトンの目には、無智な人々が音楽と呼びならわしているこの  
音は、眞の音楽をわれわれに思い出させるためのものでしかなか、た。われわれは今、  
魂と肉体とを歌うことにはひたり満足が出来ばえを示しながら、一方、思考によつて肉  
体を称讃し、そして思考によつて魂を否定する、という思考の策略を弄しているのであ  
る。デカルト的幾何学者は、かれがこさえ上げるあの論理の噪音によつて、幾何学者で  
ない他の人々よりも、われわれを誤らせやすい。ところが詩人は、かれの作品には噪音  
がなすすぎる、という当然の理由からして、われわれを自今自身の方に、すつとよく導  
きかえしてくれる。しかしプラトンは、どんな詩人よりもさらにはるか遠くまで、教導  
の技術を推し進めた人である。それは、噪音があんなにた、ぶり不足しているとしても、  
またそれがあんなにた、ぶり足りてもある、あのお伽ばなしを多く用いることによつて  
である。プラトンが求めてあること、それは、神聖にして表現しがたいテーマを、われ  
われがめいめい各自で歌うようにせよ、ということなのだ。かれはわれわれを助け出す  
と同時にまた、われわれがめいめいで思考するがままに放任する。これはちようと、乳  
母が子供に歩行を教えるときに示すやり方と同じである。こういうわけであるから、借

大なベートーヴェンが、身体から分解された魂、噪音なき音楽を存在させたのは、われわれのいひがそれを自今で思考し、自今で歌うことを、かれが望んだがためにちがいない、と私は思っている。

「ぼくがこれから別の言い方で述べるのも、つまりそのことなのだ」とミッシェルが応じた。「ぼくはかなりの年になつてからやつと理解したのだが、このオラヴァリエーションのような音楽、テーマがもはや表面に出てこないヴァリエーションを演奏するときには、リズムや表情を強調してテーマを模倣しようとするのは、つましまねばならない。そして何ものを先に期待することなしに、まったく飾り気のない、坦々とした調子で弾くべきである。こういうわけだから、ぼくらはこの大男のアラン老に、正しいことを承認されたのだから、これからぼくらの思想に肉体をあたえるために、このソナタ全体をカ一杯弾き通すことにしよう。そうともし、この古物のヴァイオリンで結構だともし、ミッシェルは弦の調子を調べながらいった。「そうではないか、音楽のように美しい音を出さうなどと欲ばるのにはバカ気なことだ。さあ、クリスチーヌさん、君の忘れてならないこと、それは、君がピアノのメカニックな力を代表している」ということだ。戦わぬ先からもう征服されているようではいけないよ。」

音楽は、音楽自身よりほかの何物も表現しない。だがこの鳴りひびく対象は、それがあらゆる対象をかき消したのがゆゑにこそ、まさに若々しい意志であつた。この意志は、夢思に転落したことと一度ではなかつた。だがいずれも束の間の転落にすぎない。この



意志は異教的なたわひれを、そして歓喜を、わが物にしていた。

訳 註

— プロローグ —

(1) ヘアルゴニヌの森林

アルゴニヌはシャンパーニュ州の北東部を占め、深い森林に掩われた起伏に富む山地である。オ一次大戦の全期間を通じて、ここで、仏軍と独軍が激烈な攻防戦をつづけた。有名なヴェルダンはこの森林地帯の東側にある。アランは、一九一四年四月十六日で兵役を志願し、重砲兵隊にただ一介の兵士として入隊、一九一六年ヴェルダンの近くで負傷、その後は気象隊に編入されて一九一七年秋まで戦地にあった。当時の消息は、親友フロレンス・アレヴィに宛てた多くの書簡に特にくわしく語られている。

(2) ヘ『リリコリ』の森

『リリコリ』はロマン・ローランの劇曲である。



徒然草 褐玉抄 (二) 中新敬

遺領 — 「北条貞時十三年忌供養記」の資料価値をめぐって —

「金沢文庫研究」(七九・八〇号)において、多賀宗準氏は「安居院僧却覚守について」なる論文を発表しておられる。これは兼好法師の關東より歸洛した時期を考察するのに関連と存つてゐる。「金沢文庫古文書・五五四書状」にあらわれた「覚守僧却」の行蹟を稽查されたものである。該書状の時期決定に關心を有するものには興味深いものがあった。

氏は論文の追記に、覚守僧都の死没時期に一つのみ推定を試みられた。それは「桃裕行氏の御教示によつて知り得たし」ことを前置きし、「円覚寺文書」を引用され、その中に記された「遺領」の語から、覚守の没年を推定されたものである。即ち、覚守は「北条貞時十三年忌」にあたる、元亨三年十月の頃には、既に他界してゐたのではなからうかといふのが氏の見解ということになる。

このことは「五五四書状」の年次が何れの年にあるか、未決定のまま、論争の過程を出ない現今の研究段階には、有力な一つの示唆を提示されたことになるので、兼好の伝記を研究してゐる者の注目せざるを得ないところであつた。



特に「五五四書状」を以て、「元弘三年のもの」と推定を下している私説の立場に對しては、一「の反証を提起されたことになり得るわけであり、該書状の内証たる、「兼好帰洛」の年次が元亨三年（一三三三）を下り得ないことになる。先に書状年次は延慶元年（一三〇八）や、徳治二年（一三〇三）と推定された既説には、極めて有利な論拠となるわけである。

多賀氏は書状の「大殿」を「<sup>1</sup>実時に推定し、その延慶元年説を支持しておられるようである。

関靖博士によつて、始めて「五五四書状」が学界に紹介されたのであるが、それが、「元弘三年のもの」であると推定する私の立場は当初より不変である。書状の筆者を、「金沢貞頭」と認めたり、「倉柄兼雄」に推定することは、私の立場ではない。私は今もこの見解を頑なに固執している。

さて、こういう私の立場は多賀氏の推定説によつて、再検討の場に立たざるを得なくなつた。もし、氏説を認めるとすれば、「五五四書状」は当然、元亨三年以前のものと相違なく、「元弘三年のもの」は否定せざるを得なくなる。ひいては「兼好帰洛」という、彼の伝記の「一頁は別途に、改めて考えなおさねばならぬことになる。然しながら、多賀氏にも、この問題点については、明確なる論証がなされたわけではない。氏は「同覚寺文書」に「重要資料」たる性格を認めつつも、なお「覚守没年」の断案は後考に期待しておられるようである。

今、私は、その後の氏説展開に接する機会の得られないうち、該文書に對する愚見を  
申し述べて、氏を始め文献諸家の御批正を仰ぎ得れば幸甚と思ふものである。

論証の便宜上、既に周知のものではあるが、改めて、「円覚寺文書」を再録させてい  
ただきたい。

(1) 「円覚寺文書」所收「北条貞時十三年忌供養記」(鎌倉市史、史料篇カニ、七六頁)  
心。聡。澄。俊。朝。評。憲。守。貞。海。等。於。論。談。之。席。各。稱。之。族。也。依。有。可。被。行。入。講。之。感。聞。

雖。無。揚。請。自。京。都。今。度。下。向。其。中。澄。俊。僧。都。當。第。三。座。之。講。師。流。富。輝。之。弁。僧。滿。座。之。感  
激。可。云。希。世。之。才。者。乎

(2) 御導師

安居院大納言律師憲守

其先澄憲、開說道以來、累世名家也、澄憲生聖覺、聖覺生隆承、生顯美、生顯基、  
生憲守、外父覺守、先年御得圓寺、殿下向關東之時、當(賞々)觀之余、浴恩沃華、  
彼道領憲守相伝之、為關東御恩仁上、今度御仙事、中可參之旨、兼曰以依者、依何申被、詩容  
了。(因京筆者)

「鎌倉市史」の編者は、この文書を「重要資料」と認めることにおいて、之を採録し

たのに相違ない。私も亦、文書をそのように認めるのに吝かなものではない。然し、この文書の記述性を仔細に吟味すれば、その客観的史料価値には些からず扞悞の念を禁じえないものがある。文面通り、史料価値を素直に受容れていゝものであるか、その記録性に全幅の信頼をかけることには躊躇せざるをえない。問題の「遺領」の語も亦、その一つである。

断つておきたいが、私は文書の実物について之を实地に調査したものでない。こゝでは「鎌倉市史」が採録し、多賀氏が引用された所に従つて、その内外徴証に検討吟味を加えろまでのことである。こういう私の態度には、或は文献諸家の専門的立場からは厳しい批判が提起されるかもしれない。いかんせん、私は古文書についてはズブの素人であり、到底、そのような立場からの批判には堪えられないかもしれない。慙笑さるべき錯誤を恐れるものであるが、重ねて忌憚なき御教示を仰ぎたい。

まず考えられることは、文書筆者がどのような立場や性格の人であるかという問題である。筆者が安居院唱導歌でないことは明らかである。私には、佞養の行われた円覚寺僧の筆録と推定されるのであり、これは文書の資料価値にかかわる問題点であるから後にその理由を詳考したい。

次に安居院は京都の天台宗寺院であるのに対し、円覚寺は鎌倉の禅宗寺院（開基、北条時宗）且又、北条氏の菩提寺として、幕府代々庇護の篤いことも念頭におく必要がある。



この寺で「貞時十三年忌」の大仏事が嚴修されるとあれば、仏事の主導権は、いうまでもなく、円覚寺長老の手中にあることも明らかなる所であり、ことさらに在京の他宗安居院にそれを要請せねばならぬいわれはないはずである。然るに文書は安居院唱導家の人々が、幕府の招請なきに、唯「八講を修する」という風聞を得て、わざわざ京都より押かけたことを明記している。

叡山の悪僧強訴は、古い時代から、山の因襲であつたが、「雖無招請」下向という行動には、その強引さに、何か共通の性格が認められないわけではない。幕府側には有難き感であるが、結果は彼らの下向を認めることになつた、こゝにも考えねばならぬ問題があるやうだ。

安居院家は、ただ我武看羅に押かけたのではない。それには彼ら一流の口実があつた。その口実は文書にあらわれている。一門の「覺守」に対する関東の御恩仁というものがそれである。文面によれば憲守の外父覺守は「先年へ最勝園寺毀御代」下向関東之時、當院之余、浴恩沢屋、彼道領憲守相伝之爲関東御恩仁上、今度御仏事中可参」と明記されている。「道領」の語はこゝに用いられている。貞時と覺守の間にはこういう既成の事實があつた。

御恩と奉行とは鎌倉幕府の強調した武士関係の倫理である。安居院家は覺守の貞時に對する御恩をその仏事に奉行するといふのが、下向の口実である。それは事前にはわざわざ使者をたてて申入れられた。これはかなり強硬に申入れられたものと想像される。

愚に着せるといふことは、世間の常規であるが、奉行の押売りはあまり聞かない。安居院衆の下向は外見、美談の性格に見られしようが、その内部に秘められた魂胆は、幕府の捷勢に阿諛し、自家の發達を意圖する売名的行動とも解釈できぬわけではない。「御恩に」をうけた当人たる覚守が、これを申入れるのなるともかく、女婿憲守らが、それを強調するとなれば、幕府側も意外の感をもつのが自然であらう。この時、既に幕府側には仏事の計画は組まれていたであらうし、他所者の安居院衆が、奉行を企に希て、この計画に割り込むとあつては、迷惑千萬なことに相違ない。恐らく最初は「わやわやの厚志は有難いが、それには及ぶまい」と体裁よく断つたではあるまいか。この間の事情は短い文書のどこにもあらわれていない。唯私には兼日以使者依同申被許容了」といふ短い文章の紙背に、そういう気配が感ぜられぬわけではないのである。これは文書の断片語に対する後代の感覺であるといわれるとそれまでのことか知りないが、幕府は結果的に一門の下向を許容することになつてゐる。これには使者の強引をねばりのみでさう簡単にケリがついたとは考えられない。薄弱な口実は断わられ、ばそれまでのことであらう。幕府が下向を許容したのには、口実以外に何か強力を裏付けがあつたからのごとくに考えねばならぬ。然しながらさういふ背後の事態については、文書は何も記す所はない。そこに文書筆者の立場が考えられる。彼は京都における安居院の裏面工作については何ら知る所のない門外漢ではない。

薄弱な口実は、その薄弱さを意識する者には何らかの補強工作が施される。畏が非でも下向して、幕府権勢と因縁を深からしめ、一門の筆冢に役立てようとするのは唱導家の世俗的な意欲である。彼らほどのような手を打つたであらうか。文書の語ってくれない安居院の裏面工作を、私は「花園院宗記、元亨三年九月晦日」の条下に見る。

晦日己未、晴、早旦内々供花結願之儀如例、憲守為御導師、前大納言公秀、春宮権大夫具親、三位降朝羞座、権大夫取被物退之間、自條下押出加布施前辨也具親卿取之給、憲守、今日憲守、自此院直下向閑東云々、是貞時入道十三年之仏事為唱導、又八講之故云々、先之於御影堂被召憲守、下向旨申入之、及申刻還御（後略）

この花園院御記により「後伏見上皇、故北条貞時十三年忌ニ依リ、憲守ヲシテ鎮念ニ下向セシメラレられたことを知る。即ち憲守は後伏見上皇の院宣を帯して閑東下向を行ったことがわかるのである。

ところでこの院宣は、後伏見上皇御自らの意志の発動であつたらうか、私に付、ここで「寛守の「閑東御恩仁」という薄弱な口實を考へるとき、安居院の有力者が後伏見院に嘆願して、院宣をいたつたといふと考へざるを得なくなるのである。

幕府と持明院統皇室との和親的關係は史実に著しい所である。それ故、この因縁關係



を利用して後伏見院に嘆願したものがいた筈であると一応考えてよさそうである。

当時、安居院一統において、皇室と最も関係の深い人物を求めるとすれば、それはまづ覺守を考へねばならぬことにならう。覺守が、後伏見院の御仏事に導師として奉仕することができたのし、やはり外父覺守の後楯によるものと想像されないのであるか。

尊卑分脈の系図によれば、覺守は堀川大納言具守の猶子となっている。その時期は不明であるが、彼が「大納言」を自らの祿号に用いて「安居院大納言僧都覺守」と号していたのは、この因縁に基づくものであるか。

堀川大納言具守は即ち、後二条天皇の外祖父にあたる。覺守が安居院一門にありながら他の人々より抜んで、皇室と深いつながりをもち得たのは、こういう背景を念頭することなしには理解できないであろう。

既に多賀氏の整理された彼の年譜にあらわれているように、覺守は早く龜山殿（龜山法皇御所）の心要御談義（永仁二年二月廿日）や、その御仏事にも勤仕している。これは恐らく彼の青少年時代のことと思われるが、ついでには、後守多院日吉社御幸（永仁六年十月十五日）に先達をとめたことが「元徳二年日吉社并叡山行幸記」に見える。堀川具守の猶子とあれば院には他に勝る特別の關係があつてのことであらう。院の御養、慈道法親王との關係も記録に見られる。御子後二条天皇との直接的資料は見出されないようであるが、延慶元年八月その崩御に際して、哀傷歌を詠んでいることは、統子載集

にいちじるしい。やはり帝御生存中には親炙し奉ったと見るのがおだやかなようである。その他尊治親王御息所のために仏を供したこともある。

このように見てくると、覚守の事歴は大覚寺統室室にのみ、その因縁が深いようであるが、彼は**大覚寺統**の方々のみならず、**持明院統**の方々との関係も亦、文献に徴するところがあるのである。多賀氏の御説よりの引用を統ければ、永仁三年閏二月七日、後深草法皇御懺法結願には既に講師として、名をとめておられるし、下つては延慶年間、伏見後伏見西院の仏事に説法を行い「満座隨喜 宣撰那再題款」とまで激賞されたことが記録されている、又西院の行われた石清水八幡宮御経供養にも、表白説法を行い、その功により法印に叙せられている。又、衣教門院（後伏見后妃）のために薬師葺屋をつとめたり、御産御祈の導師としてもなつてゐる。門院の御父、時の権勢家西園寺公衡の堂侍養には導師をつとめたこともある。

以上の事歴は覚守を西院との何れかのみに結びつけることの不可を如実に示すものであり、彼は西院何れとも交渉するところ淺からざるものがある。皇室におかれて、彼の才弁がいかに尊重されていたかをうかがうに難くない。

覚守は安居院の正嫡ではなかつたが、その実力においては一門の統率者であり、之に堀川家との関係もバックにすれば、当時の西院皇室のみならず、公卿家に至るまで、その活動の舞台は広範であり、これがひいては、関東に下つて、幕府の尊信する縁ともなつたのであるまいか。その名を舌は正に富樫那の再誕を思わせるものがあり、自由

無碍にその弁才を發揮できたようである。

彼の閑東下向は三次に及んでいるし、それが何れも「共糸貞晴」との関係に強く結ばれていることは、特に注意する必要がある。

以上の如き覺守の活動圖を念頭すれば、その名が花園院宸詔の中に見出されたとしてもふしぎではない。

閑東において貞時の十三年忌供養が行われるとすれば、安居院一門の人々の中誰を指しても真先に下向すべきは、この覺守でなければならぬはずである。しかるに、下向衆の中にその名は見出すことができず、これが理由を暗示するか如く、文面には「遺領」という語があらわれて、問題を提起しているのである。かくて諳の眼にも「遺領」が示唆する所、直ちに、覺守の他家を想像したくなるのは一応の理といえようか。

しかし筆者は「遺領」の語を、覺守の死の事実結びつけて、確認したからこそ、かく書いたのであろうか。私が多賀氏の推定説に敢て問題を提出した文書の資料価値はこの点を指摘するからのごとである。

資料価値を判断するのは、たゞ、問題視できるといっただけでは不充分である、その問題点が那邊にあるのかを身体的に論証せねばならぬ。

その方へはすでに指摘したように、憲守が後伏見院の院宣を帯して下向しているといふ事実である。これは花園院の御託によつて、まがうかたなき事実である。しかるに、



この特筆大書すべき事実が、文書には、その片断もあらわれていない。記されているのは関東御契仁という薄弱な口実のみである。これはどう解釈すべき所であろうか。

私は文書の筆者が京都における安居院の裏面工作に暗く、それには何ら融れえな立場におかれていた人であると併せざるを得ないのである。知っていて書かないということであれば、事の本来輕重を識別できない無学の徒と評しえよう。

オ二に、筆者が京都の安居院の家についていかに暗いかは「頭実」「頭基」の人名誤記にあらわれている。これは正しくは「憲実」「憲基」でなくてはならぬ。「頭」と「憲」とは普通の文字であり、いかにも聞き書き的存記録に生じ易い錯誤の性格を感じしめる。それに「憲」の字は、安居院正統を顯示する象徴的意味をもっている。それは唱導家の始祖通憲（信西入道）の意に由来するものであり、一門に人は多いであろうが、ただ正嫡の子に対してのみ許された字であることに注意する必要がある。血統をうけた人でし、みだりに、この字をもって命名することは許されていないのである。こういう用字の重たさを知らず、これを普通の頭字に当てて恬然として居られる所に、筆者が安居院の事情にいかうとい人であるかは如実にあらわれていると見るべきである。

オ三に筆者は、寛守の関東下向の年次を単に「先年」と記し、それにわざわざ「最勝園寺殿御代」と注を附記した。これのみによっては何年のことが明確を欠く。しかし、多賀氏が紹介された寛守に関する金沢文庫古文書によれば、寛守の「初度関東下向」は

「徳治二年」と明確に指摘できるのである。特にそれが「初度」と断つてある限り、覚守は徳治二年以前には関東に下向したことがないと考えてよからう。このことをまずはっきりと押えてから、「最勝園寺殿御代」の附記を吟味するがよい。「最勝園寺」はいうまでもなく「北条貞時」のことである。

今「御代」の語について私見をいへば、これは一般に「治世」を意味する。この場合の「御代」は貞時の治世であり、治世は即ち政が「幕府執持職」にいた時期と解さねばならぬ。されば漠然と書かれた先年と、その先年を注した最勝園寺殿御代との間には、時期的な矛盾が指摘されることになる。

貞時が執持職を退いたのは「正安三年（一三〇一）八月二十二日」のことであり、彼はこれを期として、その後は、執持職に再就していない。従つて、正安三年八月以降の時期は、彼の治世、即ち「御代」ではあり得ないわけである。しかるに文書の筆者は、その年より六年後の「徳治二年（一三〇七）」という年に「初度下向」した覚守に対し、それは貞時治世のことであつたとわざわざ注記したことになる。徳治二年ならば、執持は「師時」であり、師時の「御代」でなくてはなるまい。これは明らかに、覚守の下向という事実と、文書筆者の記憶の間に矛盾があり、錯迷があることを指摘せざるをえないことになる。筆者は折角の註記によつて逆に、覚守の下向という事実に対する自らの不明を暴露することになつてしまつたのである。ところが、貞時の十三年忌に因することだけに、このような逆断が犯されることになつたのかも知れないが、筆者が京都側

の安居院の事情に疎いものであると共に、鎌倉朝の幕府の事情にもそれほどくわしくはないものであることは、こゝいう文書の断片にも自らあらわれていると見ねばなるまい。

オ四に、文書には、下向衆の中、憲守の叔父、覺守の兄である「澄俊僧都」の弁才を賞揚した言に「涼高樓之弁」と書いてある。これは「慈富樓那之弁」と書くべき所である。即ち「法」は「法」の当て字として用いられたものらしい。先に頭憲の音通を以て誤認に陥つた筆者は、こゝでは、訓読の同一性から、恣意的な書き方をしたことになる。これは筆者の記録的性格を窺いうる好個の論点と認めてよからう。この筆者は、佐筆の如き記録専門の文字の徒ではなからう。

僅か数行の文章の中で、このように事實に対する無知、文字の誤用等、甚しい錯迷が指摘される以上、この円覚寺文書の客観的資料価値がどの程度に信憑されてよいかは、おのずから警戒を要することになりはせぬであらうか。

多賀氏が指摘された「道領」の語も亦、安居院唱導家の内部事情にかかわる事柄なのである。安居院の事情については極めて無知な立場にある筆者が、どのようにして「道領」の示唆する事實を確認した上、これを記したのか、私には甚だおぼつかないのである。この語の示唆する所を素直にはいたさかざるものである。恐らく、何らかの事情あつて、下向できなかつた覺守を臆測して、それを彼の死に連断したのではなからうか。「貞時十三年忌の催された元亨三年十月のころには覺守はすでにこの世の人ではなからうか。



ったと考えるべきであろう」と推定を試みられた氏説は、私をして云わしむればいかにも論拠薄弱の感みを禁じ得ないと評さざるを得ないのである。

以上、私は「金沢文庫研究」八九号の拙論附言3に記したことをここに果したわけである。

「五五四書状」の年次を「覚守僧都」の死没から究明せんとする立場は円覚寺文書によつては異しうべくもないというのが愚見の結論である。問題の年次は依然として「大野」の称呼にかかつており「実時」ではなくして、「頭時」に考える方が穩当である。書状はなお多角的な考察を要するであろうが、それらはいずれ別稿に期待したい。

私も亦「覚守僧都」の没年について、考えあぐんだことであるが、遺憾ながら、見るべき成果はもち合わさないとというのが正直な告白である。

しかしながら、こゝに一ツの極めておぼろげな示唆がないわけではない。それは直接覚守に関わるものではあり得ないが、下向一門の中で、最も弁才を賞讃されている「澄俊僧都」についてである。

「八坂神社記録」は、康永二年（一三四三）十月廿九日の条下に「今日於北靈山如法經十種供養有之、聽聞了、云々」と記されてあるのだが、その「供養」の傍記に「導師安居院中納言法印澄俊」と、その名を止めている。これによると、覚守の死、澄俊は康永二年十月という時期には、なお生存していたことは確實と認めねばならぬ。單純に考

える立場からすれば、年令的に云つて、兄が生存している時期に、弟が生存したからとて、些かも不自然ではない。ただ、人の世は老幼不定である。弟が兄に先立つことだつてあり得ないわけではなく、これだけの記録によつてのみでは、もとより覚守の没年を割り出すことはできないのは云うまでもない。しかし、少くとも、そこには極めて薄弱ながら一つの示唆がないわけではなからう。即ち、覚守は元亨三年（一三三三）や元弘三年（一三三三）より以後の年たる康永二年（一三四三）という年に生存したからとて、年令的には些かも不自然ではあり得ないといふことである。これを客観的な直接資料を得られないまま、元亨三年の頃（或は元弘三年の頃）覚守は老令に堪えず、既に他界していただろうなどという臆説を出すものがあるとすれば、それは極めて危険なことであらうといふ警告にはなりうるであらう。

さて、私の乏しい考察によつて、覚守の没年資料は何も揃へることができなかつた。しかしながら、覚守は当代切つての唱導の名家である。公家や僧家に仕存する古文書を採搜すれば何処かに彼の事歴を証する、より客観的資料が発見されないこともなきやうな気がする。私は覚守の伝記究明を志すものではないが、「五五四書状」の如き、やうした面から重要な資料の一であることを考えないわけではない。該書状が「元弘三年のもの」であることは、改めて別の角度から吟味したいと念願しているのである。

① 「圖書寮所蔵 桂宮水滸書・私家集八」に收められた「法印公順」の「拾遺鈔」才三には「兼好法師勸進梅（榎々）尾鎮守住吉社法樂哥」といふのが見えている。又同鈔才六には「法印覺守勸進三首哥」といふのも見えている。兼好と覺守とは「法印公順」を介して、和歌の世東においてもつながり得る可能性が一つの示唆として認められてよ  
 かるう。

② 続現葉和歌集卷才十釈教歌

我見燈明仏本覺光端如此の心を 積少僧都憲守

むかし見しおしおかけなからめぐりきておなし光の山のけの月

覺守の女婿憲守も亦、和歌を嗜んでいる。

③ 「花園院宸記」によれば、憲守の関東下向同系に「堀川具親」の名が見出される。覺守と堀川家との関係を念頭すれば、具親と憲守との関係が成立することは不自然ではなからう。憲守が後伏見院御仏事の導師たりえたのも、その背後に堀川家―覺守の線がバック・アップしていたことは想像に難くない。具守、具親に直結する兼好は、憲守ら安居院一門の下向を全然知らなかつたのでなかろう。

「徒然草」才五十段に兼好は衣長の比、「東山より安居院邊へ罷り侍りしに云々」とある。これは主家の用命を帯びてのことであつたかも知れない。

④ 憲守の妹は「吉田中納言隆長」に嫁している。「徒然草」才百七十七段の「吉田中納言は或は「隆長」かし知れずい。



⑤ 「八坂神社記録」の中には「倉栖」を名乗る武士について、次のよう記事が散見す  
る。

康永二年七月十一日 倉栖六郎左衛門上洛、付西小家。

全十三日、倉栖六郎左衛門（同子息六郎）来、今度上洛初対面、（夜陰）酒献之。

全廿四日 倉栖討ヨリノヒリキ毛馬、今夕於五条室丁矢野殿マテ売之、三貫二百文也  
内百文ハ使ニ給之。

全廿五日 倉栖（預之）皮鞆、腹巻二両上候之間云々、

全廿六日 倉栖所預染皮十一枚云々。

全九月十二日 倉栖六郎左衛門近目可下向之間、元所預具足、大略先日取之上、今日  
又取之、所預置之具足注文并狀有之、赴前取之。

全十月十二日 倉栖六郎左衛門来、明日下向河部云々一献了。

右「倉栖氏」が、金沢文庫古文書の「倉栖兼雄」やその息「四郎」とどういふ關係に  
あるのか、又、十月十二日の条下にあられた地名「下河辺」とは古文書「下総国下  
河辺庄嶺地郷地頭職許疎狀案」（所務文書篇五三九号）の「下河辺」と如何なる關係  
にならざるのか今後の課題として究明を要するであらう。

右は、本論と直接關係なきも、兼好伝記研究のためには、何らか示唆する所あるかと  
考ふる。参考に供する次才である。

事大なる、事下に下す事は、

事下、本館の事務に於て、事務の進行に支障を及ぼす事、及び、事務の進行に支障を及ぼす事、

事下、本館の事務に於て、事務の進行に支障を及ぼす事、及び、事務の進行に支障を及ぼす事、

事下、本館の事務に於て、事務の進行に支障を及ぼす事、及び、事務の進行に支障を及ぼす事、

事下、本館の事務に於て、事務の進行に支障を及ぼす事、及び、事務の進行に支障を及ぼす事、

事下、本館の事務に於て、事務の進行に支障を及ぼす事、及び、事務の進行に支障を及ぼす事、

事下、本館の事務に於て、事務の進行に支障を及ぼす事、及び、事務の進行に支障を及ぼす事、

事下、本館の事務に於て、事務の進行に支障を及ぼす事、及び、事務の進行に支障を及ぼす事、

◎ 「人種雑誌」の中心に「急務」を掲げ、その中心に「急務」を掲げ、その中心に「急務」を掲げ、

も ち の 木

原 田 慶

悲 し み よ お ま え は

青いこぶしをつき出し  
無精ひげをはやして  
太陽を呼ぶ

もちの木的心を

誰も愛撫してやらな  
傷ついても赤い樹液の一滴も  
流してみせようとしない  
はずかしがりの青白い心を  
じつとがまんして

悲しくて  
顔だけは元気に  
白いはちまきをして  
いる  
もちの木を

531 7

朝になつたらおまえは去らねばならぬ  
私がよそおいをこらして出まわくのた  
から

おまえがそつとたちを去るように  
あけ放してあるドアのところで  
いつまでも佇んで私の心を返してく  
れないと

私は何人にとほうにくれる  
しかたなく私はおまえごと私の心をか  
かえて

出てゆかなければならぬ  
おまえは私に寄りそつて私の心をも  
て  
あそぶ

おまえは時々おまえかかつて私を夢中  
にさせる



そのよいだに私の時間がからまわりを始

め

積みあげた私の一日が音をたててくすれ

去るのだ

おまえは泣きながら見ているのだが

やっぱり私からいこうとしない

332 9.

いのち

流れくだる谷まの水は

たれてもすくって

口にしたいと

何となく思つてみるものです

たとえ上流にあつても

平地をのそのろ

はいまわっている水には

だれもが平気で唾をします

333. 4. 2

夏休みの終りに

長い休みのうちに

白い粉をふりかぶり

逝く人の眠りのようにおまえ

古い校舎よ

その静けさに

表情をこわばらせ

大声で笑うこともできなくなつたのだ

と

杖なしでは倒れてしまふのだと

信じて老いてしまった男のよう

おまえは眼を閉じていた

おまえの眠りはゆるされなかつたのだ

夏は終り

こどもたちは帰って来た

海から山から

太陽のベッドから

思いきりよくかえって来た

そして

展覧会の絵をみる人の足どりはほどにも

時折リたちどまることもせず

おまえのうでの中で

コロコロ笑いさわぎたて

おまえの年とったことなど

言いきかせてもわかりはしない

そこでおまえは気がかなければならない

おれは決して老いすぎてはいなかったの

だ

ブルンと大きく身振いするのだ

大声で笑い出すのだ

こどもたちは喜んでおまえと合唱する

だろ

2.339

し氏に

あなたはいつもわらっている

私は毎日あなたの眼をのぞきこんで

——本当にわらっているの、しゃるので

しょうか

——そう、わらっているのだよ、きみ

わたしがわらっていることを、どうして

てそんをにらたがうのだね

ああ、あなたはいつも、ほんとうにい

つもわらっているの、しゃいますね

微笑みが、生れたときのよう

あんなにも自然に

たれにあたえろ微笑みでしなく

あまりにも多くのものたちのために

木

枝をもしぎとられ  
 まろい傷あとを残して  
 水々は素直にのびていた  
 かれらにあるのは  
 明日だけではないか  
 背をのびし 決して  
 振りむこうとしないのでは  
 はないか  
 ひとがあざわらうて  
 いる時にも  
 ただ明日をのぞこうと  
 背のびしているのでは  
 はないか  
 つばきをはきかけられ  
 定げにされても  
 いづれ機嫌よく  
 明日を待って

春

ひとり胸をはたませて  
 いるのではない  
 か  
 庭ではあまりにも  
 空が青すぎたので  
 坂を上り  
 墓地に入つて  
 見あげてもあまりに  
 濃く  
 暗れわたつた青で  
 自然がうすよごれ  
 桜がかえつて景色を  
 よごしていた  
 ただ  
 人のつくつた新しい  
 建物の  
 赤い屋根が  
 今日こそとうかびあがり



白壁の家にべんがらが紅い  
急な坂を下って見えなくなった

自転車

すっと先の平らな道に再び

小さな姿を見せる

空に向って話しているのかと思ふほどに

女の音が高く高くひろがって

流れ出す

風がやって来てかしの木をゆすり

どうしていつまでもたくさんの枯葉を

つけているのかとおどろくばかり

がさがさと鳴らす

待っていた春がやって来たのに

すこしは淋します

今日がなくなるときを思い

明日を恐れているのはどうしてだろう

トラックが走り去る

運転手はまっすぐ前をみて

## 夜

ハンドルをにぎっていたらうか

とんちん

雨の音がしていた

どこかで電話のベルが

けたたましく鳴っている

本と

紙くずとレコードと

そのすきまに坐り

バイオリンをきく

二人

234511

## 夕映え

夕映えの刻が来た

人をなつかしみ 哀しみ 愛撫する

夕餉まえの土間を放たれて

群れつどう子供らは

一日の終りを告げ

花を踏み土に並べ

石に葉に坐して

陽に触れるよろこびをもつ

気づかれぬしずかきで

山が近づき

陽はたち去るのだ

かげたちはいつそう濃いかげとなり

ものたちが初めてのように肌をあらわす

そんな時刻を知らせるプレリュードが

遠くからはこばれて来る

5.38 10 19

### 風景

いつわらぬ自然よ

そこにあるそのままだが

みんな何んとうである風景よ

気づらず

けんそんを自然よ

なにもこぼれず

みなを調和させて

包容する風景よ

わたいはそれを

どこまでも ひとつけて歩きたい

5.37 10 15

### 双樹

ひからびて、そばあちたこのはだには

陽がいたいのだ  
だきしめることのできない距離を  
此の底にさぐり  
髪をなびかせてかすかにふれあう

風に耐えはげまし  
そいて  
ともに倒れる時  
ひとつの竈で  
やさしくもえあがろう

### 手 套

死んだ人が残した手套、知らぬ見が  
なんとむごんに使つて惜しまぬこと  
か

使いふるした手套には

222.1.11

### 芭 蕉

あなたの香がすみついて悲しいが  
使う時を待たずに逝つてしまわれた  
あなたの手套なのではかなさげ  
しみるのです  
捨てる惜しまぬほどに  
なぜ使つて逝かれなかつたか  
いのちを信じたあたらしい手套なので  
かなしさはだじむのです

222.1.11

### 群 の 中 で

まっすぐに足をふまえ  
ゆれていた芭蕉よ  
たおれることを知っていてなぜに  
実をつけなければならなかつたのか  
自然のおきてを信じ



野の饗宴

あらがわす  
おまえは誇らしく果たした  
居並ぶ仲間達はおまえの心根を哀しみ  
ただおまえに寄りそってゐるのだ

夜

白い部屋にバイオリンが透り  
柱のらくがきがにじみ出す  
夜光時計の点点として  
三面鏡の奥にメドゥサの怒り  
わたしはペルセウスであり  
アンドロメダである  
ザワザワと  
人の拍手がきこえる

おまえは誇らしく果たした  
居並ぶ仲間達はおまえの心根を哀しみ  
ただおまえに寄りそってゐるのだ

自然にならってポーズをとるためには  
心に愛が必要です

さわやかな葉を鳴らし  
花を開きましよう

パイプをくゆらして  
イチゴを五つばかりそえなければなり  
ません

あなたの肌をいっばいのみどりに  
うすめるのがなによりです

おしゃべりをやめてしずかな  
呼吸でゆったりと手をあげると

水がサラサラ  
あなたの足もとを洗って行きます

たちよ、てはあまりにはなやかすぎる  
ではありませんか

今日はおまつりではないのです

さあ 髪をかきあげておきなさい

237.11

### ダンスとノウゼンハレンの花

昨年末のことであるが たまたまある本の中に 小さな写真版のマティスを見つけた

ダンスとノウゼンハレンの花

ノウゼンハレンという音が大変微妙なひびきをしている

ノウゼンハレン と舌をすべらせると染しいらスムがある

日本名で金蓮花というのだが 少しイメ

ージのちがう どうか名前である 私

はこの絵に詩をうませようと努力した

おどっている人に話しかけた 反応がな

い ノーゼンハレンに話しかけた

ノウゼンハレンよ 私はギンギンした  
板床の上を音をたてないで歩くことが  
できます おなた達より もっとずつ  
としかたにおどることのできるのです  
私はまちがったと思う 近ごろ考える  
のだが マティスは もう うたって  
いる わたしたちは熱心に耳をかたむ  
けなければいけない と

以前 私はマネの草上の寧をうたつた  
ことがある この絵には うたい出そ  
うとするものが そろってそのまま  
まはたきをやめてたちどまった パン  
トマイムのようなものがある  
マティスは うたっている

壁にはりつけた切紙のように しかし  
あたたかいからたを持った女たちが  
輪になつておどっている それは何の  
おどりでよく ひらいた ひらいた

でもよいのだ。その一人ひとりがあるダンス  
存のである。そしてひさごの首を切りお  
とした花生けの中でノウゼンハレンはバ  
イオリンを鳴らし、空っぽの椅子は、ダ  
ブルベースをうけもつ。そこでダンス  
は一さわ軽やかに、しずかに、送り出  
されてくる。

近ごろ、小さを本の中に、マティスの  
ダンスをひいた、ノウゼンハレンよ  
り後の作品である。やはり軽やかな輪舞  
であるが、背をそらせ、腹を突き出し  
それぞれが最もすばらしくおどっている  
。しかしこれは人のおどりである。ノウゼ  
ンハレンのダンスはダンスそのものであ  
る。  
ダンスの方の、アイロニカルな、もう少  
しうりきれないかなしみのようなものを  
私は受け入れることができないのであ

## 春

りんご箱の下から  
頭を突き出すネギボウズ

たった一晚のうちに見知らぬ建物が  
生まれていた

コンクリートの岩壁にそって歩いて行  
くと

おどりの草は甘い香を咲かせ  
ウマノアシガタがひよるとのび  
待みあげた芝草は白く沈んでいる  
曇り日の下で竹群のいらだちかきこえ  
る



いちぢくはからいにおいをまとい  
風はきまぐれに走りあるくけれど  
湖に流れついたボートは  
もう帰るところをもたないのだ

昭和六年四月二十日

## 道

うすやみの中ではじめて  
どんなにまっすぐのびていたか  
わかる道がある  
背をまるめてくわを肩った老人が  
ゆっくりとたどっている時  
白くすっきりうきあがって見える  
まぶしい光の中では  
はにかんで人々のまえでみどけてみせ

るために  
人々はほとんどよく見ようともしない  
で  
目の端から笑いかほしてしまふものな  
のだ

あまりにまっすぐなので人々は  
自分が信じられなくなり  
かえてつまづいてしまふような道が  
ある  
そこで人々は綱渡りのように両手をあ  
げて  
用心ぶかく進み  
曲り角に来るとはじめて安心して口笛  
を  
吹き始めるのだ  
どこまでもまっすぐなために

時々水に登らないではいられなくなる道  
がある

人々はついに目をつぶってかけ出したく  
なってしまう

決してひきかえす勇気を持たせない道が  
人々を遠ざけているのだ

239.6 3

おまえはいつまでも

おまえはいつまでもねむっているのだろ

うが

見守る者のいない

小さなベッドで

ゆりおこして

大きくなることを促すものはいないのだ

ガラス窓もなく

電燈もなく

それでいてくらやみにいるのではなく

何を知ろうとしせずに

逝ってしまった早熟な子よ

風の音がしているドアのかけで

まだ見ることをしなかった目を

おまえは決してひらこうとばしな

239.9 29

夕暮

青い屋根のはしに

うすすみ色の雲が

ひっかか、ていて

高い空に すればす、キリと  
三日月がうかんでいる

黄色いレモンの香のする  
煙の輪をすいこむと  
ぼんやりとした不安にとりつかれる

首輪をつるしあげられた犬が  
土をつかまえようとしがいている

壁  
画

時にけびっこをいいて  
歩いてみるのしよ

そうすればきつと  
二本の足と鞍の長さに

気がつくから

たとえば目だまを  
たてに並べてみるのしよ  
ひとはどちらへ向って歩こうとしてい  
るか  
わからなくなる

それでも人は 何かに向って  
歩く

ブルドッグに出あったら  
帽子をみだにかぶり  
巻き篋をくわえて  
両の肩にすだ袋をかける

そして最後に  
貴夫人にであったとしたら



目だまを髪の中へしまいこむのだ

1929.10.15

### 橋

カブよくきつぱりとした鉄の橋や、セメントの橋は、川を活動的に見せ、きまつて川岸には煙突が立ち並んで、しずんだ力強さをひそめていゝものである。

丸太棒の橋は、田舎の小川をなつかしくさせる橋だ。わらわうりやゴムたびの往來する橋なのだ。

両端を黒い土に深く、くいこませ、しかりさえた丸太棒の橋は、だんだん肉をおとして骨だけになり、人々は足でためてみては、渡るのだけれど、どうしてどうしてなかなか折れたりはいないものだ。いゝそのこと折れてくれれば、新

しい丸太を持って来ようものさと思つて、上ではねてみては折れはしない。そんなにねばりづよいのが丸太棒の橋だ。

橋を渡ると気分がかわるものだ。長い橋を渡る間、人は考えを中断させる。特に、突然、橋の上に出た時の、歓喜には似た気持は、人々を夢中にさせずにはおかない。狭い川には小さな橋。

それはそれで、少しやさしい気持にさせ、小さなよろこびをしのびこませる。広い川には長い橋。ああ、それは素晴らしい開放的な気分をつくる。

さらさらと水が流れているなら、ケレ気どってしんみりと、水を見つめているのもよい。いつか自分が、水に逆らつて川をのぼるような錯覚におちいる。そして、できるだけ遠くまでのぼりたい

ものだと思いついて、ふと目ばたきをする  
ると、すぐ停つてしまつて、がっかりし  
ながら、またその錯覚をくりかえそうと、  
自分から努力してみるのはむしろよく楽  
しいものだ。

水の上になつて眺めると、橋からみてい  
たのとすつかりちがつてみえるから、人  
人は橋の上で水をみつめてみるのかよい。  
岸に腰をみろしてみつめていた時のあの  
やさしい水が、無邪気に笑いながら残酷  
をやつてのける子供のように、さきさき  
なものをおし流して動いてゐる。

人々のみこみそうを深い流れの上では、  
もう話すことはできない。渡つてしまつ  
て振り返ると何でもなかつたようにおと  
なしく渡れている水に、人々は再び勇  
気をとりもどす。それを経験するため  
は、大きな河口の堰に行つて、角おとし

をはめこむために、文ぐりせられた橋  
の口からのせきこんでみるとよい。こ  
の橋は、水を支配しようとして人々が  
築きあげたとりである。私達はこ  
とりにあがつて水をみた時、その恐  
ろしいにおどろくことができる。

しかし橋は、風景の気分を変へるため  
に草を分け水々をぬつてわたされるリ  
ボンでなければならぬ。

最も念入りに仕上げられた曲線や直線  
でなければならぬ。

橋 それは限界をつき破ろうとする  
幸せ。

とび出そうとしてどこまでおちが  
る 世界への気孔。

たとえそれが、道の延長として渡され  
たものであつたとしても、橋は、自ら  
存在する。

けいと、う

四日も雨が降っています

それでも明るくて

わたしの部屋はしずかです

水さしと花びんがあります

だたみのぬが波のようにひろがって

行きます

わたしは今

雨の中から持ってきた

けいと、うの種をひとつひとつ

ぬき出していろのです

こまかいまっくろの粒たちが

けいと、うのからだを蝕んでいたのです

539. ?

窓

この窓 あこの窓

あの窓 この窓

そわらを結ぶ線は

ときに放射状をつくり

または三角形をつくり

ふしぎな絵模様を

空間に交錯させるが

窓と窓とはそっぽむいて

視線を合わそうとはしない

539. 10. 18



九 月

彼岸が咲きはじめてた  
それは、ひとつの願いをこめて  
土から生れ出る姿

すべての種子は太り  
もう

よりあっておとなしくねむってはいら  
れない

羽根をもつものたちも  
つめをつけたものたちも  
受けとったものによって  
もつともよく生きなければならぬ

夏は燃えて去り  
自然はみにくくほほけてはいるが

九 月

夏は大地をはぐくみ続けたのだ  
虫たちが、ひっそりと成長し  
よもぎもひえもすつしりと重い

そしてあの目立たない  
秋の花々が  
気づかれぬところへ、ひらことうとして  
いる

8.39 9.2

石垣があり  
丈高い雑草がしげっていて  
すっとおく深く空がある  
人がよごしてしまった水や  
あやまっていためてしまった水も草も

そのままとどつて見える

人々は何か気がかりなように  
たよりなげに歩く

夏が

立ち去ろうとしてためらっているのか  
もう季節に自信がもてなくなつたのだ  
みんなに自然はわたしたちのものだ  
たのに  
と彼らは考える

長いスカートをからげて

草をぬけて来た女は

すっかり足もとを秋にうすめていた

S.39. 4.

町  
に  
て

駅

踏み切りのしゃ断機は、おりにいるこ  
とど、あがつてゐることと、どちらが  
多いのだらうか。

汽関車と、ディーゼルがこうたいし、  
線路が切りかえられ、この駅はずい分  
いそがしいのだけれど、踏み切りの番  
人は白い旗を振り、新しい制服の男は  
窓ガラスをふいていて、少しもあわて  
たりはしていない。

誰もたれも、しなければならないこと  
をしていて、他人の事にはかまわない  
から、たくさんの事が、ずいぶん単調  
に見えたりするのだ。

ホームの上に渡されたトロッコの格は  
カラガラとあけっぴろげな音をたてて  
動く。つりさげられたトロッコは、ブ

ラブラとわがままにおりて来て、駄員の手につかまると、しかたがないようにひかれて行ってしまふ。

### 階段

ホームの階段を、人々は太急ぎでのぼる。どこへ行けば安息が待っているのか、それはもんだいではない。自分の席をめざして、人々は走って行く。目のまわるような席にも、それが自分の席であるがために、人々はかけてゆくのだ。どうしてそんなに急ぐのか、と人々は自問する。そしてやはり大またで、少しでも早く行きつくために、急いでいる自分を見出す。

### シクラメン

冬野菜をきれいに並べている小さな店では、その白や濃いみどりのために、店がひきたってみえる。

くらい土間の店で、シクラメンが次に咲かせるつぼみのために、思案している。

背の高い娘が、その店先で化粧を始めた。小さな頬を柱にかけて、目を大きくおしひらき、唇は少しくすく、鼻は少しつまみあげて、ソビエトの長ぐつをはくと、ひょうひょうと出かけて行くのだ。

### 苗水うり

苗水うりが、急いで、国道を横切ってきて、どこか遠くからやって来ては、



静かな足音をたてて、ひっそりと町にはいつて来る。金物屋の裏庭でも、タバコ屋の庭先でも、苗木たちは、花を咲かせようと努力することをおしめはしない。しかし苗木たちがおもうように自今たちの仕事を、なすとげられるかどうかということに、苗木うりは樂觀しすぎるのではないか。苗木たちをおきざりにして、いかにもさばさばと、からのかごを買って帰って行く。

## 風

美しい冬空と、きたならしい雪は、少しも調和しているようではないけれど、それは、どうしようもないようにみえるから、そんなにつりよいな風景ではないのだ。

黒い桜のみきと、枯れ草は、寄りあって、少しも動かないでいようとしている。

長屋のひくい軒下を、よごれた猫が、目を細くしてのろのろと歩いていった。

手もちぶさたな昼は、空一杯のポリエレンを、うかべようと、くわだてているようだけれど、あのきたならしい雪は、少しもたち去ろうとはしない。風が、つかまえる者のいない、おにごっこのように、腕をひろげてかけて行った。

## スカート

夏のスカートをつけている娘が、いつものように、風にくしゃくしゃになり

ながら歩いて来る。

彼女がもう少し、市地の厚いスカートを  
つくらないのは、ただ彼女の怠慢の  
ようにしか考えられないことが、人々  
のはればれとしない原因になる。彼女  
は毎日、町工場へ働きに行く。雪空  
の下で、彼女のスカートが、紙のよう  
に、ペラペラと舞いあがる。

うしろ、

## 二 人

あなたが花束を受けとると

くやしう思ひ

あなたが悲しむと

同じ悲しみがかなしいこと

はらきたて

わたしはあなたの道を大急ぎで走って

行く

だのに

わたしがおになつて

つかまえようとする

あなたもおになりたがり

あなたがつかまる方にまわると

わたしもつかまる方になりたくなつて

二人で手をたいてにげるので

おにごっこがうまくい、たためしがな

い

友達なのに

うまく遊びができないで

二人としかくれてしまつたりするから

感もすがしには来ない

仕方なくそろそろとはい出して来て

両手をポケットにつっこんで

はなをすすりながら

石などポーンとけつてい

夢

5.40.2.27,

どうしてねむるの

つかれたのです ねむらせてください

あなたはいつも さめさせようとして

おいでになる

太陽はあかるい

ねむってはいけない

おまえの胸で歯ぎしりの音がする

おまえの手からたんぽぽのわた毛がと

んで

おまえの目につきまざる

ねむ、てはいけない

あのそうそうしさを聞いてごらん

首の長いすおめの黄色い目

しっぽのはえたおりのため息

緑色のかたつむり

×トロノームの銀の音

ひかれて行く牛の鼻水

打たれる土のひびき

くんしようをつけた 蜘蛛の足

たれかがふんづけています

重くてともしみきゑがれないのです

ガラス戸が開きましたか

人がはいって来たのですか

広い広い道です  
あなたに頭を玉かやつりがはえていま  
すよ

CHAPTER 15

階  
段

どこまでのぼれば

晴れた空の下に出るか

水車のように

かぎりなく

同じ地点で踏んでいるのか

草のはえない

コンクリートの洞窟

かわいた壁は

容赦なくはね返し

小さなノックさえ

ひきのばし おしひろげ  
音たちをおびえさせるのだ

無表情な鉄のドアは  
番号を背負って

貝のように  
黙っている

ことばのないおそれ

追う者のいない逃亡者

ドアにぶつかっては

急いで折れ曲がり

右へ右へ廻って行きながら

けっして方向を失わない

現実のしらしらし

羽ばたきを忘れ

飛び去る目をなくした



石の鳥

塗りこめられた

最後の階段が

無言で

侵入者を追い返す

S. 40.6

河

不透明な重い雲

朱をにじませて

二本の平行線が

ふいにかさなる

熟れる時が

待てなかつた果実

抱むことを

ふそわらなかつた  
樹々たち

水底の町

眠る人々の背で

錆びた

砂がくずれる

蟹の軽妙さと

ためらい

裸足の爪の

うしなわれたかたち

長い袋小路の

ゆめの黒点

老遊の顔は

すりへった

みちばたの石仏に似ている

かつては光っていた  
種子たち  
アスファルトの中の蟬の

声

ものたちは  
すぎて行く傷みを  
自分で  
忘れ去ることはできない

S. 40. 7

無題

あなたはいま  
自分で自分の顔を見ることができない  
疲れた心に  
いぎどおりのむちをあて  
愛する詩人の像をきざむ

詩人は容赦なく  
かつてのいたみをあなたにおしつけ  
みずからに刃をつきたてることをも  
める

詩人はあなたの中に薙り  
拒むことを強いる  
かなしみとなまめるい涙  
うたがいとあいまいなおそれ  
すべてをはらいのけてあなたは  
すぎさった苦しみへ帰って行くことす  
るのか

あなたを行かせないためには  
あたらしいくるしみをなげつけるより  
ほかにないのか  
はなれないためには  
いっしょにいな  
いというよりほかにないのか

S. 40. 7. 17.

夏

赤いレンガの谷間  
かわいた真昼の夏を  
蝶がのぼる

くつがえされた谷底は  
苧む人の足跡  
石原からはいあがろうとした蔦は  
根をたち切られて  
レンガの上に  
黒い手きからませて死んだ  
窓を押し開いて頬をのぞかせるのが  
物語のヒーローでなくとも  
谷底の風は  
彼女をむきとめるにたりる

そして

すぐ下に死がからみついていくことに  
彼女が気づかずにいることを

たれとがめることはできない

小さな石をつみ重ねて

たばこを一本たてておいた男は

何がほしかったのか

人々は立ちどま、て自身の方法をえら

んだ

真昼の夏の中で

人々は何も期待しなかったのだ

それほどすろおで感じやすかったのだ

蝶はおもたげにのぼる

しかし決して

どこまでも行ってしまおうとはしない

Sho. 8.11

嶮

嶮

原田 憲雄

1962.2.21

流れる水のほとり  
たけた草の中に  
牛の糞をおき  
窓人たちをおき

切斷された  
梨の木から  
噴きでた緑  
ヒゲの男  
太陽の下に  
目を細め

ウイルギリウスは  
曲った腰に手をあて  
口笛をふく

萱草の花は

風に

そよぐ

暗いパピルスに

さうされた

しなびた

人生

白髪の少年李賀のように

倨傲に

心よわく

草の中の窓人たちに

氣づかれぬように

枯れた豆畑を横ぎってゆく

碧の江に

ひまわりはただよい

ブレモン



の祈りは  
昇天し  
草むらは  
いきれ  
あおじろい  
老子は  
黄土の彼方に  
消え  
夏の光  
は  
崦嵫  
を  
望み  
ガソリヤ  
戦記  
は  
水の面

を  
流れ  
去  
る

鞭打行者呪

1962.2.2

蝸牛は  
殺菌された天國で  
悠然と  
ビゼの樹皮と  
はみ  
トネリコは  
女の靴毛を  
紡ぎ  
鮮明な足は

不遇の友を愛しすぎた

壺佛

扁壺の中に作られた

アドニスので

牛飢えの追ひ出し祭

駝鳥は遺産の尾を曳き

ピアノ

の上に坐りこみ

博學を

雇われ教師に

日輪の

金色の人を

説く

埋葬地の乳房  
姉妹の臨

酸奶子に匙さし

胡弓をひき

ピン・ラン・イエを歌え

石を背に投げ

十月に満したたらせ

眠りを離れ

自我と自我とにおいて熱視し

釣と弓矢とを持ち

一本の足を他の腿の上におけ

ふさぎこむ

智慧

素馨は爐に伏し

提辯家の陳龍文は落穿した

傾

壺

この古調 たれにささげむ

11001100

Semicolon

Period

くし

初竈

李賀

と

われ

と

壺傾け

二日

濁酒半壺

机邊

亂れ

三日過ぐ

去哉

雪

依し

キ

春

を

解壁

ヤ

ト

蛇

穴と出づ

*Jeune*

*Costume*

老いし哉

獨活の芽

Masoch

細き舌

龍州

の

水奴

減び

ネロの宴

風

光る

ens per se

の

限りまで



スベキアーリス ノリチチア

燃え

李

燃え

St. Thomas

いぬふぐり

なべて

かがよへり

末黒野

ビツに  
質鐵究竟

ぞ

ゆれやまふ

蟻の道

輝き

天

に

昇ら

む

日

アマリリス

あまき

ねむたく

アマリリス

桃  
青む  
H E K A  
ヨカナンの首  
埋むべし

蓮の  
浮葉  
カテキスム  
流き  
根は  
泥に

を  
秘めごと  
毒の水に  
くべ

九月盃

きみに捧ぐ

蘭荔  
乾紅の  
鄧橋と  
黄との

積雨  
滂沱を巻き

或る夜

織と  
月に逢ふ

鳥  
渡る

epiphase

の  
しづけ

に

の  
G E H E N A  
秋  
深し

の民  
遠白く

蓼

に

杜

を

寒いつつ

衰へぬ

彭祖

巫咸

死したる

後

ななかまど

猿狖

と

撃て

ジューピテル!

春

の

野

に

春  
光

残る雪

のこして

ひとの

去りゆきし

揚空雀

落空雀

われや

ひとり

野に

鳥  
雪に入る



われ  
幻をのみ  
恋じて

春光

淡き

あしひし

昏れゆきの

淡き

恋

あしひし

昏れ

淡き

春光

あしひし

昏れ

淡き

春光

淡き

あしひし

昏れ

淡き

春光

あしひし

南の風

1965. 5. 31.

とぼしい夢の穂  
埃をふくんだ  
くらい南の風が吹く  
海は  
鋭い波を  
岸に  
はこぶ

ヒヤシンスの滅んだ  
丘  
水のない谷間に  
くんだり  
生きのこったやましま、  
肩に  
くいこませ

骨ばって瘦せた

記憶を

ふり捨てようつとめるが

皮ぬいで

あせやかに

身をくわらせる

蛇

のように

は

ゆかないのだ

かなしみのために

石になればよかった

どぶの中を

きよろきよろ

歩きまわるネズミのように

すえた

白っぽい

現在

死んだひとたちから

わすれられ

時々

小さなためいきを

そーと吐いて

あたりを見まわす

くらい

南の風が

ふく

波

くすれ

夢

落ち

燕は歸ってこない

毒人夢のまひびかせ

エレゲイオンを

歌う

ことも

草はむ山羊に

やさしい

眼差を投げかけること

もなくなつた

羽を生やした種子たちは

送々と

空にのぼり

目のみえぬ童女

の聲

に

幻の底

かけめぐら

釘

1965.5.26

となりのおやじが

板場に釘をうつ

釘はわたしの心臓につき刺さる

わたしは

叫ぶことができない

おやじは板場にうつつ釘が

わたしの心臓にとどくのを知っている

顔をみるたびに

えへへと笑っておじぎをする

あれが何よりの證據

もちろんおやじは

わたしが痛いといつたって

えへへもう二三本

というだけだ

もう二三本もうたれたら

心臓は破裂するのだが  
どうぞといつて笑うより  
仕方がない

光と影のあいだで

1965.7.2

圖形の風景に  
やせた鳥  
透きとおる梨

たわむれる

微風のむこうに

澄む日時計

つつましい木々は

静脈の梢に

光ちりばめ



夢の中でホトトギスがさう  
たえず變化する

裸の泉

まだ來ぬ

天使は

すてに去り

暗い

小徑に

花みだれ

海の舌は

遠く

かがやく

石

1965.7.6.

盲の蛇に

たれか杖をかしてやらないか

おやすい御用

だがかれには手がな

盲の蛇は

そろそろ

石のうえを違つてゆく

この

冷たく

硬いもの

やさくれた腹にこころよく

うっとりするとたん

鼻先

ゴリリ

まったく

うっとりなんぞしておれぬ

否應なしに

そいつを

のみこます

これこそほんとうの親口というものだ

盲の蛇は

そそそろ

氣をくばって

いっしょけんめい

這うがいい

### 窮之災

1965.7.6

たれが想像しただろう

ヒゲ美しく

雷鳴をとしない

人民どもを畏怖させた

龍が

風にさらされ

骨となって

博物館の

前庭の

噴水のかたわうで

光あび

しらちゃけて

水蔭に

やや退屈した

兎人たちの

はなしの

接ぎ練に

あざけられ

身のおきどころに

くるしむとは

### チエホフ

1965.7.13.

ポンペイの料理屋で

飲んだ葡萄酒のいきおいで

チエホフは

奮然として決意した  
ヴェスビオス山征服を

變せ馬に

鞍うって

とことこと

麓にいった

さて 征服にとりかかろ

交と砂利

熔鑛の固化した波濤

硫黄

の層におおわれた

土

くさい煙

どろりと流れる

岩石

かれが見たのはこれだけだった

それから  
膝まで灰にうずもれ

麓にくだり

馬にまたがり

小さな村を通りすぎ

「彼女」のことを

かんがえながら

家に歸った

この話を

信ずることができないとは

一八九一年四月七日の

かれの

手紙を読むがいい

寓 話

1965.7.18.

もう日がいりかかっている

もう月が上りかかっている

前の種は飛びやすい  
メクラの國では  
なにしろ片目が王様で  
卵を投げて牛は來ず  
針の穴から  
ラクダが抜けていったって  
たれも氣にかけない  
急がないと遅くなる  
といつたやうたら  
醫者をよぶより  
いっそ子供を殺すかと  
夫婦で相談する始末  
ほえる犬は噛まないが  
島には眼 瓶には耳 だ  
出した使は定かのろく  
風がだんだんきつくなる

曇っているが降りもすまい  
梅は來年よく咲くだろう  
廣大なおぼしめし  
本のような話しつかり  
二つの類のやりばにこまる

パンを少しいただきたい  
ジャガイモを少しいただきたい  
魚にまじったジャコの  
トンボにまじった蝶の  
おうようなこと  
えすばにや城の石獸は凍を流し  
見るに忍びぬ風景だ  
もう日がいりかかっている  
もう月が上りかかっている

論

争

1965.7.13



小さな池に  
二匹または三匹の

カエルがいる

わたしは二匹とおしうのだが

女房が三匹だと言ひ張るので

ところでカエルの一匹が

ケロケロと鳴き出した

もう一匹が

クウクウと

ケロケロとクウクウと鳴くといつたら

ギロギロとグウグウですよと

女房がいう

そういえばそうとしいえようが

ケロケロクウクウと

わたしには聞えるのだ

だうしてその方が可憐ではないか

だからロマンチストとわらわれるのよ  
女房はわたしを憫殺する

ケロケロクウクウがロマンチズムで  
ギロギログウグウがリアリズムか

草野心平という詩人の

ロロリッはそれでは何いずムか

そういう論理は女房には

カエルのツラにケんとかて

ケロケロとまたいいだした

いやギロギロといいだした

どうやら閑口したらしい

カエルはすっかり鳴きやんだ

哀 歌

1947. 7. 28

海の見える森

太陽が

馬はしらせ空高く

わたってゆく

野兎を返す

キツネ  
くさむらに潜む  
冷たい蛇  
風は  
たえず  
葉むらきゆる  
遠くの方で  
あわれな隠者の猿が  
フナをしかけて  
獲物をまつ  
それらを  
ほんやり  
見ているうちに  
仲間を失った  
歌舞隊長の  
タンポポ  
笛をふいてし  
うたつても

ひばりも  
鳩も  
姿をみせぬ  
クルミは  
線亂と花をまとい  
黒い河口の  
いるか遠  
ゆるい園陣をつくりはしたが  
かれらはソンボで  
わるいことには  
みんながそれを知っている  
ひっこし  
口バには乗れるが  
調子の狂った  
錠前は  
ひらかない  
緑の蜥蜴がやってきて  
チロチロ

尾を振る  
 いったい同情してるのか  
 ふざけているのか  
 にがい徒勞の  
 あどしどり  
 ながく續かぬ  
 さまざまの夢想  
 タンホホは  
 泣きたくなつて  
 毛をむしつては  
 吹き  
 むしつては  
 吹き  
 しているうちに  
 海は水平線を上下し  
 森は輪郭を擴大し  
 しあからい  
 風が

すべてを  
 奪つて  
 いったしまつた

寒山詩

(二)

原田憲雄 譯注

54 正49周50朝49唐50大32

よびかわし はちすを とると

おもしろぎ きよき かわべに

あそびつつ くるるを しらね

しばしばも つむじかぜ たち

さざなみに うくや おしどり

おこなみに ゆるる みかどり

わがふねを こころに とどめて

たゆたえる こころ はてなし

相喚採芙蓉 可憐清江裏 遊戯不覺暮

屢見狂風起 浪捧鴛鴦兒 波搖漁艇子

此時居舟楫 浩蕩情無已

55 正51周52朝51唐52大33

青柳は暗くけぶりて

散る花は霞のごとし

背の君は 妻恋村に

妻はまた 思夫町に

天離りかたみに住みぬ

いつの日に相まみえんや

月てらす家にぞ告げん

な飼いそね雙の燕

・垂柳暗如煙 飛花飄似霞 夫居離婦州

婦住思夫縣 各在天一涯 何時復相見

寄語明月樓 莫野雙飛鷺

暗・大吹作結 復・正本周本朝本唐詩作得

唐詩注一作復 56 正52周53朝52唐53大34

酒あれば 相招き 飲み

肉あれば 相呼ひて 食う

いすれ みな 黄泉のひとぞ



わかきとき つとめはげみね

玉の帯は しぼしやく花

金のかんざし とわにたまたじ

張じしはた 鄭ばばも

みまかりて たよりぞ聞かぬ

・有酒相招飲 有肉相呼喚 黄泉前後人

少壯須努力 玉帶暫時華 金釵非久飾

張翁與鄭婆 一去無消息

57 正53周54朝53卷54大34

ほれほれするよな いい男

おんとおぬけた 腕ッ節

まだ 三十に ならぬのに

口八丁 手八丁

荒駒の 伊達をあらそい

呑みねえ食いねえて 仲間あつめる

惜しいことには どのつし こいつし

無尽灯 とぼす気が ない  
・可憐好丈夫 身體極後綾 春秋未三十

才藝百般能 金鞆逐俠客 玉饌真良朋

唯有一般惡 不傳無盡燈

・後綾正本作後綾

58 正54周55朝54卷55大35

桃の花 夏を越さんや

風と月 うながしやます

漢代の人 もとむとも

ひとりだに 残るものなし

朝々に 花ちりおちて

歳々に 人うつりゆく

きょう 埃おぐるちまたし

さきの日は わだつみなりき

桃花欲經花 風月僅不待 訪覓漢代人

能無一箇在 朝朝花遽落 歳歳人移改

今日揚塵窟 昔時瀉大海

59 正55周56朝55卷56大36

東どなりの娘っこ  
年はかれこれ十と八つ

西どなりから夜這いに来  
うどうぞ夫婦になつとくれし

羊を煮ては 殺生し

頼よせ合うて みだらごと

ほほほ ははは と楽しんで

さきは 地獄で 泣きくらす

我見東家女 年可十有八 函舍競來問

厨娘夫妻信 烹羊煮衆命 聚頭作婿殺

含笑樂呵呵 啼笑受殃決

十有正水周本唐詩作有十唐詩注一作十

有 估 厨本唐詩作活唐詩注一作估 決

正水周本唐詩作扶唐詩注一作扶

60 正56周57朝56唐57大38

田舎の旦那は畑もち

うまやにや牛がい、ばいて

困累を信じる気などない

やかてやぶれる欲の皮

みるみる消えてゆくものを

せつせとかせいだ気になつて

瓦のふんどし 紙ばかり

あげくははてが野垂れ死に

・田舎多桑園 牛犢満鹿敷 肯信有因果

頑皮早晚裂 眼看消磨盡 當頭各自活

紙袴瓦作褌 到頭凍餓殺

褌 正水朝本作褌

ワシハ百十四ノ犬ヲ見タ

ドイツモコイツモ毛ハモジヤモジヤ

臥タイヤツハ臥ココガリ

歩キタイヤツハ歩イテル

一カタマリノ骨ヲ投ゲテミタ

ワット牙ムイテ大喧嘩ダ

ジツサイ骨ガスクナイカラナ

犬ガ多クテトテモミンナニ渡ラヌカラナ

・我見百十狗 箇箇毛鬣鬣 臥者樂自卧

行者樂自行 投之一塊骨 相與嗔嗔爭

良由馬骨ノ 狗多分不平

集正本周本朝本唐詩作渠

あまのはら ふりさけみれば

白雪の よしに たちこめ

とび からす 飽きて たゆたい

あおとりぞ 飢えて さまよう

駿馬は 荒野に 追われ

宮内は 驢馬の 出で入る

天高く 関うすべしなし

滄波に すむ みよささい

極目今長望 白雲四茫茫 鷓鴣飽膳膝

鸞鳳飢待徨 駿馬放石磧 寒壁能至堂

天高不可関 鷓鴣在滄浪

鴉正本周本朝本唐詩作鷓

洛陽は 女おんなここ多し

春の目を 化粧けあひこらして

みちのべの 花々 手折たひり

高きまげに さしにけるかもし

まげ高く 花とりまげば

ひとらみて 目をそばだつれ

しみじみと いとしまれんと

しちかえり 背の君に見す

洛陽多女兒 春日還華展 共折路邊花

各持挿高髻 髻高花匝匝 人見皆睥睨

別求醜醜憐 將歸見夫婿

集正本周本朝本唐詩作唐 西正本作市

春は 女ら こゝまり化粧して

つれだつてピクニツク 南の郊外へ

花見ハ つれない 日ぐれどき

かくれんほする袖から 嫌な風

若い衆が まわりから やうてくる

金のおしがり つけた白馬で

「なんたうて ぞんをんしつにく かう

かうの

いっけるわよ　うちひとにさし

・春女衛宮儀　相将南陌陸　看花愁日晩

・隱樹怕風吹　年少從侍束　白馬兼金鞍

何須久相弄　兒家夫婦知

女らが夕陽のなかで遊んでる

風が来ると路いっばいにいい匂い

スカート　ほら　金の蝶々

まげにさした　ルビーのおしどり

女中たって　絹のブラウス

下男きてか　フラノのスボン

みるがいい　道に迷うたはっかりに

らスうろしてろ　この白髪しじ

群女歳夕陽　風来満路香　紹福金蛛蝶

挿髻玉鴛鴦　角婢紅羅縵　閨奴紫錦裳

為観失道者　髪白心惶惶

もしもお化けに逢うたなら

第一に　びっくりするな

けっして向うの手におるな

名をよべば自分でにげてゆくはずじゃ

香たいてみ仏におたのみ申し

おじきして坊さまの助けもとめる

するともし蚊が鉄の牛さすよりに

おいつには驚ばさむところなし

・苦人逢鬼魁　第一莫驚懼　捺硬莫采渠

呼名自當去　燒香請佛力　禮拜求僧助

蚊子叮鐵牛　無渠下留處

撰正本用本朝本意詩作懐　町、正本朝本

作釘

はるはると黄河の水や

ひんがしに流れてやまず

けらけらに澄む日ぞなけれ

もろびとのいのち涯あり



雲の上えにゆかんすとすと  
左にかして翼かや生かいん  
ただままさに髪かみ黒くろきとき  
立ち居ゐにに努ゆめめははびみね

浩浩くわくわく黄河水 東流長不息 悠悠不見清  
人人ひと喜よろこ有極 苟欲たが乘のり白雲 曷いか由ゆ生な羽翼  
唯當ただ鬢かみ最た時 行住須な努力

鬢かみ正ただ本ほん周しゅう本ほん朝あさ本ほん唐たう詩し作しやう鬢かみ髮はつ唐たう詩し注しゆ一  
作しやう鬢かみ時

齋いんれ木ぼくのこの船ふねにのり  
絲いん婆ぼ樹じゆの実みをば採とらんと  
大海たいかいを滑なぎつつゆゆくに  
荒波あらいなみはやまざりにのり  
一夜ひとよのつら握にぎのみしちて  
三千里さんせんり旅りょすることとし  
このまよい何なにより出でてし  
あわれかの苦くるしみよりぞ起たきぬ

・乘のり茲こゝ朽く木ぼく船ふね 採と彼か絲いん婆ぼ子し 行ゆ至き大海たいかい中ちゆう  
波なみ清きよ後ご不ふ至し 唯ただ廢ふ一いつ宿しゆく糧りやう 去き岸あし三さん千せん里り  
煩わづら悩なや從じゆう何なに生な 愁しゆう哉や緣えん苦く起き  
採と正ただ本ほん周しゅう本ほん朝あさ本ほん唐たう詩し作しやう采

むつつりと黙、まていたら  
あののものが何を言えよう  
やふの中にかくれていては  
サとリの世よ界かいへ何で出られよ  
コノコノは堅さではない  
霜しもにうたれちや病びやう氣きにならう  
泥どろの井で石田い鋤あいても  
船ふね刈かりの日は来るまいぞ  
・境さかい周しゅう本ほん唐たう詩し作しやう日にち正ただ本ほん注しゆ一いつ作しやう日にち

山やま男おとこ 心こゝろしよんぼり  
なけいてる 年としのたつのを  
苦くるしみ勞らうして盡さつんでし

仙人にいつ成れようか  
庭玄う雲閑ひらけて

林よかるく 月けきん円

「帰山本に とうするね」

「木犀がひきとあるんたし」

山客心悄悄 常嗟歲序遷 辛勤采芝水

搜斥詎成仙 庭前雲初卷 林明月正圓

不歸何所爲 桂樹相留連

搜正本朝本作搜用本作披

山くまに人すあり

霞なびき雲まけり

光とりて寄せましを

道とふくゆきがたし

うらなげきわすらいぬ

羊老いて成すなきを

慧よとひと笑え

独りの心操ましるに

有人坐山徑 雲卷兮霞理 兼芳兮欲寄

路漫兮難征 心惆悵孤疑 年老已無成

家嗔咍斯寒 獨立兮忠貞

陸、周本唐詩作極唐詩注一作陸 璣正

本唐詩作纒 漫今周本作漫漫唐詩作

漫漫兮

豚ハ人ノ肉ヲ食イ候

人 死豚ノ腸ヲ食イ候

豚ハ人ノ肉ヲ食イ候

人ハナテ豚ヲ食バシイト申シ候

豚クタバレバ水ニ抛リコミ

人クタバレバ土ニ埋メテ

タカイニ食ロウヲヤメ候ワバ

沸ヤタン湯ニモ蓮花カ咲キ候

猪喫死人肉 人喫死猪肉 猪不嫌人臭

人返道猪香 猪死抛水内 人死掘地蔵

彼此莫相喫 蓮花生沸湯

猿正本周本唐詩作詩 地正周朝唐詩譯  
本作土 嬰正本周本朝本唐詩作歌

混沌ノコロハヨカツタ

飯クワズ糞タレス

ドコノドイツガアケタノカ

九ツノ穴モツ身

食ウタメニ朝々ナキテ

税金ニ年々ナケク

一銭ニイノチヲカケテ

千入ガテニヤワシヤジヤ

・快哉混沌身 不飯復不衣 遺得誰鑽鑿

因茲立九竅 朝朝爲衣食 歲歲愁租調

千箇爭一錢 歌頭亡命叫

お泣きなされるは何ゆえじや  
涙がきるで数珠のよう  
いとしいお方にわかれたが

かどむらいてもあつたのか  
貪すりや鈍するならいゆえ

因果のことわりわからぬか

塚の死かばね御覧じろ

都合かまわすめぐる六道

・啼哭縁何事 淚如珠子顆 應當有別離

復是曾喪福 所爲在貧窮 未能了因果

塚間暗死屍 六道不干我

塚正本朝本作冢 干本本作欣 今從正本

等

機織りをいやがる女房

田作りをなまける亭主

うかうかとふける鳥打チ

ぴんしゃんとひきくらす三味線

ここ之たらなにより着物

すき腹にます食べ物じや

てめえらをたれがたまおう

辛うなつて泣きわめいても

婦女情經織 男大懶耕田 輕浮耽技諱

趾躓拈林鉉 凍骨衣應急 充腸食在先

今誰念於汝 皆痛哭蒼天

趾正中本作趾

まっとうなこともせず

「信女」とはあきれた日ごろ

口先は殊勝じやが

心には姪っかみ姪み

肉食うた口ふいて

人前であ念仏

こんなことをヤッては

地獄ゆき遊けらりよか

不行眞正道 隨邪踐行姿 口惠神佛少

心懷嫉妬多 背後嗜魚肉 人前念佛陀

如此修身處 應難避奈河

應難 正本用 本唐詩作難 河底 本作何

今從正本等

世間キつてのバカがいる

ぼんやりとまるで口バダ

人のことばはわかるけど

豚さくくりの欲行けて

底なしのひねくれもの

本當いつても嘘ととる

相手になつてやりようなし

こんな手合はよせつけぬこと

・世有一等愚 茫然恰似驢 還解人言語

貪婪狀若猪 險巖難可測 實語却成虛

誰能共伊語 令教莫此居

嶺底 本作歌 今從正本等

苗字をゴウマンという男

名はヨクボケ よび名はキタナイ

なにちとつわけがわからず



することなすこと嫌味たらしい

死ぬことはセンブリよりもおきらいで

長生きはハチミツよりもおすきです

そこでむしやむしや魚食い

肉食、いづかなあきしませぬ

有漢姓敵愾 名貪字不察 一身無所解

百事被他嫌 死惡黃連苦 生憐白蜜甜

喫魚猶未止 食肉更無厭

かくれすむ地をえらばんに

天台は言うことぞなき

猿まないて鈴すずの霧きり冷え

山のけしき草の戸に入る

竹の葉は松の間あひ

池ほりて川水ひきぬ

世のなべて捨てし身なれば

蕨わづとりのち終おえんかじ

ト擇幽居地 天台更莫言 猿啼鈴霧冷

歡色草門連 竹葉覆松室 關池引澗泉

已甘休萬事 採蕨度殘年

竹正本用本朝本唐詩作折

増えるとは心の張りの増えること

そこで増えはえしたという

変わるにはすかた形の変ること

そこで変りばえしたという

どんどん増えて変るなら

まちがいなしに仙人じや

増えも変りもせぬならば

くたばるほかにしようがない

益者益其精 可名爲有益 易者易其形

是名爲有易 能益復能易 當得上仙籍

無益後無易 終不免死厄

爲周本唐詩作之唐詩注一作爲

むだ骨折つて歴史説き

やたらに哲学読んでたが  
戸籍簿くって古いほれて

やっぱりや、まる符箋つけ

おみくじひけば大凶で

一生わるい星まわり

年にいちどは青くなる

河辺の木よりしつまらない

徒勞説三支 浪自看五經

依前注白丁 菴邊連寒卦

不又河邊樹 年年一度青

檢朝本作檢 注周本唐詩作佳唐詩注一

作注

碧瀾ニ 水清ク

寒山ニ 月白シ

默シソツ心サヤケク

空ヲ鏡ジスマイヒソケシ

碧瀾泉水清 寒山月華白 默知神自明

觀空境逾寂

ワシニハ イチマイノシヤツガ ア

ル

ウスギヌ デモナイ アヤ デモナイ

ソレデハ イツタイ ナニイロデス

カ

ハラサキ デモナイ アカ デモナ

イ

ナツニハ ソイツヲ ユカタ トシ

フユニハ ソイツヲ ハオリ ニスル

ナツ フユ ソレゾレ ツカイワケ

トハイエ イツデモ コレヒトツ

我今有一掃 非羅後非綺 借問作何色

不紅亦不紫 夏天將作衫 冬天將作衫

冬夏遞互用 長年只者是

只正本朝本作紙 者正本周本唐詩作蓮

唐詩注一作者

白い松子は栴檀の柄

いちにちじゅう いいたおい

ふうわりとうすまく霧ようですし

ゆうらりとたなびく雲に似ています

おしいただくと暑々ししのげ

ふりまげると塵しほらえる

折にふれては 方丈で

迷うた人に道しめします

・白拂栴檀柄 馨香竟日聞 柔和如卷霧

推曳似行雲 總奉恒當暑 高提復祛塵

時時方丈内 將用指迷人

叟 正本周本朝本唐詩作披 法 正本用ま

朝本唐詩作去唐詩注一作祛

欲ほけの人がごやうてたのしみを求め

なざる

百年も生きられぬ身の福いがそこにある

とはご存知なし

まあ 御覧じろ 野にたつかげろう川

のうたかた

すべては無常 人は元ぬもの

さてし野は 志 鉄の栴よりまっ直で

曲らぬ心は おのすから 眞に道が通う

てろ

霜みく竹より 行ないまっちり 気っぶ

け高たか

下らぬことには くよくよとせぬことた

とは これぞ知れましよ

貪愛有人求快活 不知福在百年身

但看陽炭浮滯水 便覺無常敗壞人

丈夫志氣直如鐵 無曲心中道自眞

行密節高雷下竹 方知不枉用心詩

世の中の有象無象が

名声と利益もとめて

花やか存舞台あこがれ

金 金 とやりくり算段

片時もやむひまなく

湯気たててかけ下りまわる

派閥争闘 手をとり合いて

ふいと呼べば わつと来る

七十年 たつかたため

消えちまひ あぶくのように

くたばれば萬事休すだ

あとつぎを誰かやるやら

土圍子 水いひたせば

どうなるか 思案しいらぬ

多少般数人 百計求名利

終營圖富貴 心未片時歇

家資寶圍圍 一呼百諾至

氷消瓦解置 死了萬事休

水浸流洋丸 方智無意智

消朝辭本作銷

欲ばりは貯金がすきで

親ばかのフクロウみだいだ

子が育ちや母食いころし

金ふえてわが身そこなう

ばらまけは福うまれ

あつめると福おこる

金かなきや福しなし

羽はたいて青空のうち

貪人好聚財 恰如暴愛子

財多還害己 散之即福生

無財亦無禍 鼓翼青雲裏

家を去ること一万里

剣ひきけ白奴うつ

汝の勝利に彼たおれ

勝利を得まば汝死す

彼の命は惜しからず

子大而食母

散之即福起



汝の命つみありや

つねに勝つすべ教えんか

むさぼりやるきはいめとす

去家一萬里 提劔擊匈奴

失刃汝即殂 渠命既不惜

教汝百勝術 不貪為上謀

護正本作謀 周本朝本作謀

いかりこそ 心の炎ほむら

功德林 やきつくすべし

菩薩道 行ずとならは

忍びてぞ まことを護れ

瞬是心中火 能焼功德林

忍辱護真心

得利渠即死  
汝命有何辜

欲行菩薩道

寒山詩(一)

夏 段 行

二 下 12

四 上 2

斑大與作班

14 15

17 16

下 11

五 下 4 5

七 上 14

百 上 14

下 13

二 下 2

正誤

正

圖書館

何

月

澄んでる

澄んでる

澄んでるよう

澄んでるよう

澄んでるよう

澄んでるよう

澄んでるよう

澄んでるよう

澄んでるよう

澄んでるよう

澄んでるよう

澄んでるよう

誤

圖所館

向

月が

澄んでるよう

澄んでるよう

澄んでるよう

澄んでるよう

澄んでるよう

澄んでるよう

澄んでるよう

澄んでるよう

澄んでるよう

澄んでるよう

澄んでるよう

澄んでるよう

澄んでるよう

澄んでるよう

澄んでるよう

澄んでるよう

澄んでるよう

澄んでるよう

伊東 静雄 私記

原 田 憲 雄

わがひとに與ふる哀歌

太陽は美しく輝き

私たちの意志の姿勢で

或は 太陽の美しく輝くことを希ひ

それらの無邊な廣大の讃歌を

手をかたくみよはせ

あゝ わがひと

しづかに私たちは歩いて行つた

輝くこの日光の中に忍びこんでゐる

かく誘ふものの何であらうとし

音なき空虚を

私たちの内の

歴然と見わくらう目の發明の

誘はるる清らかさを私は信ずる

何にならう

無縁のひととはたとへ

如かない 人氣ない山に上り

鳥々は恒に變らず鳴き

切に希はれた太陽をして

草木の囁きは時をわかつたとすると

死ど死した湖の一面に遍照させるのに

いま私たちは聴く

「太陽は美しく輝き」と歌いはじめたこの句は、明確にそこに、美しく輝く太陽を、

さし示す。われわれは、それを疑いえない。そこから豊麗に展開されるであろう燦然たる光輝の世束をまちうける。だが、つづくのは「或は」という保留であり、「太陽の美しく輝くことを希ひ」という未来への希望的仮定。いいかえれば理想像である。この仮定は、「太陽は美しく輝き」の現実性を否定する。第一行は、第二行でたまために挫折してゐるのである。「或は」ははじめ「あるひは」であつたが、昭和二十二年刊行の詩集「友聲」に収めるとき文字を改めた。第二行の荷なつた挫折の意義を、敗戦を通過したのちさらに痛切に自覺、たあらわれとして、この修正をうけとることができようか。

さて、ひとはしばしば、おのれの理想と現実とをとりちがえる。とりちがえられた理想は、現実よりもはるかに明確に美しい。世間のひとが、風変りな人間、まのぬけたひとのこととを「あいつは詩人だ」と嘲るのは、詩のなかで理想が現実として歌われることとかがわりがあるかもしれない。詩のなかでそのような転置は、しかし、詩人が理想と現実とをとり違えることによつてではなく（もちろん、とり違えることだつてない）は限らないが、理想と現実との違いを鋭く意識するがゆえに、理想を現実であるかのよかに歌うことによつて、その違いを、ズレを、さし示すのである。人間はみな、おのれの理想と現実とのズレを感じてはいる。だが、それを強く、鋭く意識しようとはしない。意識しても、表現しようとはしない。たいていは、ありあわせの理由や慰めてもつて、納得のいかない納得をします。詩人は、おのれに納得のいかないようなあやふやな納得には、がまんしない。だとすると、世間の多くのひとと詩人と、どちらが聞

の披けたひとであるうか。世間の多くと違ふものを、風変りというならば、右の一点においても、風変りな人間の代名詞として、「詩人」を用いることは許されようが、そこには、否定的 反価値的な意味をこめて使つてゐるとすれば、はたして世間の多くのひとと詩人と、どちらがつまらないか、という質問が、当然でてくるだろう。

理想と現実とのズレ、これは 古今東西の詩人に詩を作らせる第一の動機であり、ほとんどすべての詩の重要なテーマだといつてもいい。だから、「わがひとに與ふる哀歌」に 理想と現実とのズレがうたわれているとしても、別に とりたてて言うことはないようにもみえる。しかしこの二句には、伊東以前の詩人の作とは違つたひびきがあつて、それがつづく句に、だんだんはつきりしてくる。

手をかたくみあはせ

しづかに私たちは歩いて行つた

「手をかたくみあはせ」というのは 愛情から出た行爲だが、「かたく」の語、「くみあはせ」の語の ひびきには、ある決意 強い意志から出る行爲、そういうものが予感される。作者はしかし、その予感をはぐらかして、「しづかに私たちは歩いて行つた」と歌うのだ。「私たち」は、題にいう「わがひと」と「私」とである。

はぐらかして、とさきにい、たが、よく読んでみると、そうでないことがわかる。「私たち」、すなわち、わがひとと私とは、ここで、そのほかのものから決然として離別している。手をかたくみあわせることによつて。「わがひと」と「私」とが、手をかたく



くみあわせたとき、「わがひと」と「私」とは「私たち」となり、おのおのがいままで  
属していたのとは違つた空間 時間の中へ、「しづかに」歩み入つたのだ。

ひとは、愛することを知つて、はじめて、ものを見出す。というよりも、愛が、人間  
を物にむかわせる。かれ、または彼の女の 眼にうつり、意識に入るものを 特定のし  
のとして、認識させる。認識は、古来むつかしい問題で、いまもつて 疑義を提出する  
余地のないほどの確かな解答はあたえられていないようにみえる。哲学者は、分析した  
り綜合したりするだろう。科学者は、仮説を立てたり実験したりするだろう。政治家な  
らば、人民たちにおしつける術策のことだと 勘ちがいするかもしれない。それはまあそれ  
でもよい。ただ、かれらは、人をつきうごかして認識にむかわせるものが何であるかを  
みつめようとはせぬ。それが愛すること 信することだ、ということを知らぬ。

認識とは何か 何をいかに認識するのか。これらの問いに ひとびとは、いそがしく  
解答をさぐり 提出しようとする。だが、あつただしく見出され、さし出された答えは  
またたちまち打ち消されるだろう。肯定と否定との問をたえず往復するペンジユラム。  
そこからなれて 認識がゆっくり熟してくる時こそ、太陽が美しく輝く朝ではないの  
か。いまはそれが美しく輝いていないにしては、美しく輝くことを願つて「しづかに」  
「歩いて行」くよりほかに、愛するものの道は、ない。

ひとびとは違つた道へ歩み入ることを唆かすのは、たれか。何か。  
かく誘ふものの何であらうとも

私たちの内の

誘はるる清らかさを私は信ずる

さまざまのものが、われわれを唆かす。われわれを唆かすものに対して、また、さまざまの疑義や批判が噴棄する。だが、どんなものでも、いわゆる客観的な世界で、絶対に正しいとか、よいとか、いいものではない。たとえ、正しく、よい、として、それに疑義や批判を投げかける側から何とかいいうべき立場が、なくなるわけではない。現代とは、そういうあやふやな相對価値しか認めなくなった時代なのだ。そこで、われわれを誘うものの確かさを、いかに声高きいったところで、空しい反響があのれにかえってくるばかりであろう。誘われる、唆かされる、「私たちの内の」清らかさをみずから信いること。それのみが、あやふやなこの世界で、確かにあのれにいいうることなのである。

アランが『美学入門』で「疑うためには、まず確信する必要がある。したがって、美が、真に先行する必要がある」(希藤正二訳)といっているのは、深いことばである。疑うあのれのうちなるものさえ疑わねばならぬとしたら、いったい何を疑えよう。Cogito ergo sum の cogito が疑いてあることはよく知られている。ただ、ergo sum が論証の形をとりながら、じつは論証ではなく、直観であるべきこと、これもまた、こんんちではほとんど定論である。すなわち信ずるといふに付かならぬ。龍樹の『大智度論』卷一如是我門一時疾論に「しし人、心中に信あつて清浄ならば、この人は仏法に入らん、

もし信なくんば、この人は仏法に入る能わじ」といい、「信ぜざる者はいう、この事がくめぐとくならず」と。これ信ぜざる相なり。信ずる者はいう、この事かくのごとし、たとえは、牛皮のいまだ柔かならざれば屈折すべからざるがごとく、信なき人もまたかくのごとし。たとえは、牛皮のすでに柔かなれば用にしたがって作すべきごとく、信ある人もまたかくのごとし」といふ。「かくのごとし」は、ほとんどデカルトの *Cartesian* を彷彿させる。もしあれ、信するところ以外から、ものごとははじまらない。

無縁のひとはたとへ

鳥々は恒に變らず鳴き

草木の囁きは時をわかつとすると

信する人と信じない人との間では、縁の結ばれようがない。信じない人は、きのう鳴いた鳥の声ときよう鳴く鳥の声が異なることをうづなわぬ。さきにゆれた草木の囁きと今ゆれる草木のそれとが、まったく違った意味を語ることを信じようとしなさい。かれらにとつては、何でしゅうしよくたごつちゃで、せいせい、あはれは鳥の声、これは草の囁き、ということぐらいいしか見ようとしなさい。そのようにあおよそを世界には、個個のもの、一刻一刻、新しいすがたをあらわし、さまざまに囁きかけをする、微妙な変化はない。そこに何のよろこびがあるうか。よろこびのないところに、讚歌の湧き起るうはかない。だが、信することを知り、愛することを知った

いま私たちは聴く

私たちの意志の姿勢で

「聽」の字を聞いた作者の用意に注目せよ。信するもの、愛するものの意志は、その姿勢を規定する。傾聴するものの姿勢は、無關心なもののそれとは、違ふのだ。龍樹が「聽者は端視すること渴飲するがごとく、一心に語義中に入り、踴躍して法を聞いて心に悲喜す、かくのごときの人けまさに説をなすべし」という通りである。

それらの無邊を廣大の讃歎を

すべてのものはわれわれの前にひらかれてゐる。ただ眼をよけて視、耳を傾けて聽き、さえずれば、まさに「わがいまの甘露味の法門は、もし信する者あらば歓喜することを得ん」とある。ついでにいえば、伊東のこの句、デカルト「省察」第三の「つぎの語と、なんと相近いことであらう。「この廣大な光明の比類なき美しさを、せめて私の精神の力の及ぶ限りにてし、熟視し、賞讃し、無愛しよう。」（『海瀉々教説』）

世の中には、智者、学者、その他のひとがあつて、その多くは「私たち」が、驚きをもつて視、胸をときめかして眺く、廣大な無邊の讃歎のうち、輝きもひびきもない公約教や定義をしか見出さない。すべてをたくみに分類し、整理するが、それが終れば、あたふたと他のものになつてゆく。アランに「文学研究法」を教えたあの「ソルボンヌ大学の教授」のように。かれらの目のなんと癡明なことか。だが、そんな目のあはき出すものは「輝くこの日光の中に忍びこんでゐる、音なき空虚」「殆ど死した湖」ではないのか。



あゝ わがひと

輝くこの日光の中に忍びこんでゐる

音なき空虚を

歴然と現わくる目の發明の

何にならう

むしろ 智者たちのいない山にのぼり 痛切な希望によって仰がれ護えられる太陽に

かれらをあまわく照らすせるにこしたことはない。かれら、信ずること愛することを知

らぬ學者たちのために われらの愛をそそぐがよいのだ。

如かない 人氣ない山に上り

切に希はれた太陽をして

殆ど死した湖の一面に遍照させるのに

上昇と下降とが同時に存在する。中世の信仰者のことはをもってすれば、往相回向が

そのまま還相回向となつてゐる。この歌は、見ることの空虚に対して聞くことの充實を

強調してゐるように見える。たしかに月はあざむかれやすく、耳はあざむきにくい。し

かしながら ここに目と耳とのいすかいをしかみないような發明をこそ、この詩人はあ

われんてゐるのであろう。

冷たい場所

私が愛し

そのため私に「つらいひと」に

太陽が幸福にする

未知の野の彼方を信ぜしめよ

そして

眞白い花を私の慈ひに咲かしめよ

昔のひとの堪へ難く

望郷の歌であゆみすぎた

荒々しい冷たいこの岩石の

場所こそ

現実と理想とのズレがすべての詩人の発想の発端であることは、さきに行った。ところで理想が実現される場所があるものだろうか。理想は、うらがえせば、欲望の充足であろう。欲望は無限であり、人間の生命は有限である。有限なるものは、無限なるものの望みを完たしえない。愛は求め、愛は与える。求めと與えとは限りないが、その限りなきが、完全な実現をばむ。愛は、到達をめざすがぎり、出発から挫折が予想される。リルケが、神は目的ではなく、方向である、といったのは、あるいは、この間の事情を洞察していたのであるうか。

私が愛し

そのため私に「つらいひと」に

太陽が幸福にする

未知の野の彼方を信ぜしめよ

そして

愛することがなければ、ひととは、私にとつて、つらくもなんともあるまい。「つらい」の語は、他に対するしうちがつかない、そつけない、という義と、おのれにとつて堪えがたい、という義とをふくむ。私が愛するがために、ひとが私に對して、「つれなく、そ

けなく、無情であるように感ぜられ、それが私にとって堪えがたいのである。その無情は、客観的な無情ではない。無情と感ずる私にとつて無情なのであつて、その無情は「愛」することがおのれにめざまさせた感情である。愛することによつて見出したおのれのうちなる欠落が、ひとに投影し、おのれに反射したとき、私はそれを無情と受けとめるのである。おのれのうちなる欠落とはなにか、愛するひとを完全に幸福にするのがおのれには欠けているとする自覚であろう。ひとは私に幸福を求めないかもしれぬ、求められなくても、ひとを幸福にしたいと願わねばおられないのが、愛するもの的心情なのだ。それをよし、求めないと、明らか、ひとから示されたら、私はそこにひとのつれなき、ひとからわたいとむけられた結縁の切斷、を見るであろう。ひとが求めたなら、どうか、完全な幸福とは、理想の達成であろうが、さきにしろくたよ、人間の欲望が無限である以上、現実には存在しえないのではないか。すくなくとも、私の力によつては実現しえないものと判断せざるをえない。愛はひとをつらくする。愛のディレンマの構造を、これほどの確にうたい、掲げた詩を、わたくしはあまり知らない

### 太陽が幸福にする

未和の野の彼方を信せしめよ

ディレンマは打ち破らねばならぬ。知ることにのみ自得する学者ならばディレンマのうちにはさらに精密なディレンマを發明してこれを戲弄するかもしらぬ。愛する者は發明の中に安坐して概念の糸車を繰つて、いるわけにはゆかない。おのれの手をこめては實現

しえない幸福も、おのれならぬ他者、太陽によって、未知の野の彼方において、実現させられるものと信じ、そのことを、ひとにも信ぜしめなければならぬ。信ずることのほかに、デレンマをたちきる道はない。

そして

真白い花を私の憩ひに咲かしめよ

ひとが信じるとき、その信頼は、シシュファスの刑に似た私の愛の苦業の中での、ひとときの憩いとなり、憩いの中でみいだす真白い花であるだろう。

昔のひとの堪へ難く

望郷の歌であゆみすぎた

荒々しい冷たいこの岩石の

場所にくそ

昔の人は理想と現実との遮断、愛の矛盾の構造を凝視することができなかつた。これを直視した人はあつても、葛藤を断裁して血路を見出し、そこに静かな歩みを持続させえぬ人はない。かれらはみな、どこかしらないふるさとを求め、望郷の歌をうたつて、足早やにたち去つた。だが、荒々しい冷たいこの岩石の場所にこそ、わが生をいとをむところ、愛の矛盾の突破口、信頼の花壇、詩の成立の根拠を求めなければならぬ。この場所の何かに、それは、ない。

「冷たい」はもと「冷めたい」とし、昭和十五年河出書房刊『現代詩集』で「冷たい」



としたものを「反響」で改めた。この異同は、たぶん「單なる送り假名法について」作者の考への変化によるものではない。もと「冷たい」とするところにより、この語を合せ句が「未知の野の彼方を信せしめよ」の句と長さを齊しくし、そのため一種の對應共通の關係が両句の間に生じたことと、印刷の發見し、これを避けようとして「現代詩集」で「冷たい」と改めたが、れまた印刷されたのち、その句が「前句の『望郷の歌』でよゆみすぎた」と同じ長さであることの不可に氣つき、更に改めたものである。とわたくしは推察する。おそらく作者は、この詩のすべてが句が長さをひとしくせず崎嶇錯落たることを望んだであらうか、そうすることにより、隨伴する他の不可とを比較商量した上、第二句「そのため私に『うらひひと』とちらぶことを許して『冷たい』と定めたに違ひない。伊東の詩は、よみむね、後に改めた文字の方が妥帖であるように感ぜられる。

萩原朔太郎は「わがひとに與ふる哀歌」伊東静雄君の詩に「いて」に「伊東君の詩を初めて見た時、僕は島崎藤村氏の詩を讀むやうな思ひがした。僕は著者に手紙を送り、『若き日の藤村の詩を、若き青春の日に讀むやうな思ひがした』と書いた」とし、しかしながらまた再讀して、この一九三〇年代の若い詩人が、一八〇〇年代の末期に生れた若い日の藤村氏に比し、いかに甚だしく詩人的風采を異にするかを知り、再度また別の驚きを新たにした。』といひ、藤村の詩が、詩が「若草のやうに」萌えあがった時代の感情と社会相とを自我に反映したに及し、「わがひとに與ふる哀歌」は、何とい

ふ痛手にみちた歌であらう。伊東君の抒情詩には、これはや青春の悦びは何處にもない。たしかにそこには、藤村氏を思はせるやうな若さとリリズムが流れて居る。だがその「若さ」は、春の野に蒔ける草のうららかな若さではなく、地下に堅く踏みつけられ、ねか曲げられ、岩石の間に芽を吹かうとして、痛手に駕一き歪められた若さである」と対比し、「詩の全く失はれた昭和時代、社会そのものが希望を失ひ、文化そのものが目的を紛失し、すべての人が懐疑と不安の暗黒世相に生活してみるところの、まさしく昭和十年代の現代日本を表衆して居る」と、その時代的背景を解説し、「そのリズムは一行毎に破滅して支離に分散し、詩想は暗黒の憂愁に充ち、希望もなく目的もなき、ニヒルの宿命の長い影が、ウツない木島の極光に向つて、幽霊のやうな郷愁を訴へてる」。その詩の文体の印象を描いている。

引用した最後の部分には、当時の湘太郎の気分をひきよせすぎた嫌いはあるが、藤村と伊東とを対置したことは、さすがに姻縁で、「冷たい場所ではいていえない、そこいらたわれた「昔のひと」を、藤村と見たてて、さまで見当ちがいとはなるまい。藤村はその詩を「春の苔草が萌えるやうに、何の煩ひもなく、こぼれもなく、青春の悦びをば任せの自由に歌ったのだが「冷たい場所」にぶつかつたとき、詩を捨てた。藤村も散文では「荒々しい冷たいこの岩石の場所」を見はじめていたといえないことはない。だが、それを詩のなかでやらなかつたのだらうか、藤村だけではない、日本の詩人は、伊東のやうでくるまで、「冷たい場所ではうたうことこそ、詩の任務であることには

ほとんど思ひ及ばなかつた。朔太郎は、それを讀んで、いた稀な一人で、さればこそ伊東を発見し、高く評価してゐたのだ。<sup>四</sup>蝶を夢む<sup>五</sup>の「絶望の逃走」や「まづりき展望」、<sup>六</sup>氷島<sup>七</sup>の「漂泊者の歌」や「歸郷」がそれを証するであらう。そうして氷島<sup>八</sup>、そ、まさに荒々しい冷たい岩石の場所を目ざした詩集だ。だが、ニイチエ風の叫びの調子が、熱気を含んだ声で、冷たい場所にそぐわぬ感じで、結晶をさまたげた。伊東は、朔太郎が認識した方向で、朔太郎のつまづいた境界を突破したのであつた。

朔太郎も伊東も、たぶん、このことははっきり意識してゐたろう。当時すでに詩人としての輝かしい名声をたもっていた朔太郎が進んで伊東に手紙を書き、無名の伊東が、「朔太郎にもあまり近づぎにならんでゐたいと思ひます」<sup>昭和十年酒井カサ子宛手紙</sup>といつてゐるのは、そのひとつのあらわれであらう。とはいへ、伊東が朔太郎を師とよんだのは儀礼的なものではなく、<sup>九</sup>氷島<sup>十</sup>の詩人がおのれの進路を決定してくれたひとだとの自覚から生れた純粋の尊敬によるものであることは明らかである。<sup>十一</sup>氷島<sup>十二</sup>は今日にいたるまで悪声を蒙ることの多い集だが、伊東は昭和十一年一月二十八日酒井ゆり子にあてた手紙に「日本に新體詩が始つて以來の第一等の詩集」と絶讃してゐるのである。

歸郷者

自然は限りなく美しく永久に住民は

貧窮してゐた

幾度もいくども烈しくくり返し

岩壁にぶつつかつたのちに

波が去り散りに泡沫になつてひきな

がら

各自ぶつぶつ呟くのさ

私は海岸で眺めたことがある

絶えず此處で私が見た歸郷者たちは

正にその通りであつた

その不思議に一樣な獨言は私に同感

的でなく

非常に常識的にきこえた

「まゝたたく」いまは故郷に美しい

ものはない

どうして「いまは」だらう!

美しい故郷は

それが彼らの實に空しい宿題である

無数に古來の詩の詠美が證明する

曾てこの自然の中で

それと同じく美しく住民が生きたと

私は信じ得ない

ただ多くの不平と辛苦ののちに

是如として彼等の皆が

あそこで一基の墓となつてゐるのが

私を慰めいくらか幸甚にしたのであ

る

同 反 敬

田舎を逃げた私が 都會よ

どうしてお前に敵て安んじよう

詩作を覺えた私が 行爲よ

どうしてお前に憧れないことがあ

ら

無数に古來の詩の詠美が證明する

無数に古來の詩の詠美が證明する

無数に古來の詩の詠美が證明する



伊東の作品で「わたくしが最初に接したのはたぶんこの詩であった。訂二句かたちまちわたしの心に飛びこんで来た。わたくしの周囲から日常的な世界が消滅し、荒涼たる海岸が眼前にひろがり、遠くの墓石の群にむかつて歩むような錯覚に陥った。

この詩は、かれの故郷についての印象から生れたものだ。わたくしは思いこんだ。兵隊になつたとき、古兵のなかの、諫早という苗字の男がいて、伊東と同じ地の出身であることを知り、一種のなつかしさを感じたが、男は粗豪で、初年兵をいじめること、妙さ得、野戦で人肉を食つたことをよく自慢した。わたくしはかれを恐れつつ、かれを憎むよりは「自然に限りなく美しく……」の二行に溺れた。

「わたしは、その時、立原君の病氣のことは知らなかつたものだから、長崎縣には入つてからの汽車旅行は、大村灣を沿う線と、新しく別に開通した有明海沿ひの線と、二つのうちどちらを換へたらうなどと考へてみた。大村灣は、日本の地中海だと云はれるほどで、明澄で静穏でしかも快活だから、そちらの方が君の趣味に合ふかもしれない。或は一生涯忘れられない印象を受けるのぢやないかとも考へた。しかしわたしの趣味と馴染の方からいふと、有明海を是非見せたいと思つた。沈鬱な中に一種雲様な、童話風な秘密めいた色彩と光が交りあつて、これはまだ日本の詩人も畫家も畫いてゐないものだ。雑誌「四季」昭和十四年七月号にのせた「立原道造君と私」という文章に、伊東は故郷の海を「こう書いていろ。ここに示された有明海を、かれはすでに『哀歌』に収めた。『有明海の思ひ出』になつた。『同じ海が、歸郷者』のうちになつた。わたされた反面を

もったことは、ほとんど疑いない。さうして、昭和三年八月十一日付宮本新治あてはが  
キに見える「故郷の交友は私を下快にします」の語をつきあわせると、かれが故郷を  
美しく心貪しい地としたことは決定的である。

「けれどもし」かれは、印象や感情や経験をただちに言語にうつすていの詩人ではない。  
卒業論文「子親の非論」の結びにいう。

然し最後に此處で我々は一言付け加へて置かねばならない事がある。それは、子親  
の最晩年に於ては、彼の寫生といふことが單に在外物象の何等主観の裏づけなき寫眞  
術的挿像にとどまらず、それを通過して、その最も反極に立つ所の物象の内的眞の象  
徴といふこと、客観を描くことによつて自己の態マキ主観を表現しようとする様な境地  
にまで飛躍しつつあることを認め得るといふことである。

伊東は正岡子親の晩年の飛躍を指摘することによつて、おのれの詩法の出発点を表明  
したといつてよい。この詩にうたう故郷が、かれの地理上の故郷をさすのみでないこと  
は明らかである。雑誌『呂宋』昭和七年十一月、十二月にのせた「談話のかはり」とい  
う文章で、さういふていする。

ライネルトマリア・リルケに『形象詩集』といふ詩集があり、その微妙な管喻的精  
神に僕は帽を脱がされる。常に僕は詩が散文と分派する第一歩はこの管喻的精神であ  
ると思つてゐる。それはつれていつも思ひ出すのは、日本の和歌。殊に古今集の存在  
である。萬葉集が明治以來多くのエピソードを保持してゐる所以は結局、萬葉集がそ

の精神の素朴な表現をなしてゐるからで、その反對に古今集が今の歌壇で重要視されることの少いのは、反省的、意識的なその精神の表現手法が、日本人のさうりとした茶漬的嗜好にあくどく見えなからうしい。素朴といふものが、人間の一度は離れねばならぬ故郷である以上、古今集のあの定型的な譬喩や序詞や、枕詞などをも、斐然強し直す歌人の、明治以來少かつたことは、いかにも残念である。(中略) 古今集に同情しない人達が批難の的にする修飾の定型といふことも、あれははにかみ盛の日本人にはさもあるべき方向で、又一向に致命的なものではない。はにかみ盛な譬喩的精神の表現はその證據に、獨逸では美しいリードになつて育つた。それは又僕などにも魅力ある行き方で、僕の「静かなクセニエ」はそれへの足ならしめつもりである。近頃日本でも譯された「ジツドのヨパリネード」や「プロメテ」を讀むと外國人のあくめけのしたしつこさとでも言ふべき譬喩的精神のフラインな表現に感心せざるを得ない。僕は「呂」ではつくりものを書く男とされてゐる様だが、以上の様な僕の考へ方からするとあまり質量な言ひ方とはしにくく、もしじつくりと見てゐてほしいと思つてゐるのである。

伊東にとつては萬葉集は、限りなく美しい自然であり、そのエピソードは永久に食乾してゐる任氏と、感ぜられたに違ひない。雜誌「椎の木」昭和十一年一月號の「大阪」にいう。

もし私が大阪に住まなかつたら、恐らく私は詩を書かなかつたことだらうと、近頃

はよく考へる。さう考へることは大へん楽しい訓練である。誰だつて詩を書くといふことは、はづかしいことに相違ない。しかし大阪は私に詩を書く口實を與へるのだ。伊東の住む時代も、風土も、荒々しい冷たい岩石の場所であつたようである。

「大阪」はこの詩の反歌に「田舎を逃げた私が 都會よ どうしてお前に敢て安んじよう」とうたうのを注釈していろようにみえる。

河出版『現代詩集』にこれは「現代の雑多な印刷物になれすぎた眼が、あまりに性急に讀まねばいいが」と覺書してゐる。ところで性急な眼には、かれがおのれを詩人として高く持し、詩なんぞは讀まぬ一版の市民を見くだすように映つたのではなからうか。「大阪」の、さきに引いた部分につづいて、次の文がある。

……大阪では、自ら「心ある人」を以て任じてゐる人達は、私に、萩原朔太郎氏の所謂西洋の圖を、餘所の町でよりもよりやすやすと認容するからである。大阪はそんな町である。私はかかる「心ある人」をこの曲で一番輕蔑してゐる。

私は家で退屈し切つてゐるが、外に出てそんな人々に故意とさも美しく生れ故郷の風景を、興奮した口調で描寫する。そして聞き手の反應にじつと目を搖ぶるのは私の反抗の流儀である。

しかし、このたくらんだ西洋の圖を簡單には許さない一二人の友人だけが、表情の仕様もなくぼかんとして私の話に、實に實に困り切つてゐる。その表情がはじめて私を眞實に興奮させる。友人はそこまで私を辛抱強く我慢してくれねばならぬ。そこで



やうと臆ろな私はいさいきと友情を感じて 對等な、虚空な場所に浮き上る。私の目の前から大阪がなくなりました。また私の詩もなくなつてしまふ。

そんなことを繰り返して私は毎日大阪で暮してゐる。

かれのいう「大阪」が地理上の大阪だけでなく、東京や軽井沢 『四季』や『コギト』をも、時として、含めなかつた、との保証は、おそらくたれにもできないであろう。そこにも発明な「心ある人」はいたはずであり、伊東はかれらへの反抗として「静かなクセニエ」を書き「狭路は飛ばすに全路を歩いて来る」を書いたのであろう。

わたしも大阪に倦きた。

『コギト』昭和十三年十一月号に、伊東の書いた「感想」のむすびのことばである。しかも、かれはさらにその地に十五年間住み、その地で死んだ。

人間の思想の故郷である行為は美しいが、その住民は永久に貧しい。詩作はつねに行為にあこがれるが、詩が行為にゆきつくとき、つねに一墓の墓とならざるをえない。

かれはへ清純な戦争詩を七篇書いた。戦後かれの友人がかれのため詩集を編んだとき、これをのぞくよう強く求めたというが、その行為こそ、まさに、かれを「慰めいくらか幸福にした」一墓の墓だつたといつていいのであろう。

『哀歌』のほとんど終りのところには「憶（へ）老人の詩」という詩がある。『私の魂』といふことは言へない

にはじまる三五行のこの詩を、ここに全部書きうつしたいという詩惑に、何とんど抗しかねる。わたしは辛うじてそれを押しとどめた。

私はそれを君の老年のために

書きとめた

と結ぶけれども、おそろくかれは、かれの死後の「魂」のために、この微妙きわまりない一篇を書きとめたのであろう。この篇の全部を識ろうとするひとは、かれの集におもむき、かれの夢に一杓の水をそそげはよいのである。

(一九六四 六 二〇)

伊東静雄の詩をはじめ読んで日から、すでに二十五年たっている。かれは危情なわたくしの心情のすみずみまで見通しているこわい先生であるように思われた。かれの詩からそうひとりぎめしていただけで、わたくしは、かれに逢ったこともなく、たとえ機会があつたとしても、避けたであらう。

一九六〇年、小さな詩集を出したとき、伊東の友人でありその研究者であるK氏から「貴台が伊東静雄と田中虎己を一結にこねあげた人のやうな気がしてきました」というはがきをもらって、びっくりした。わたくしはK氏の引き合いに出された二人の詩を敬愛しているけれども、おのれは二人から最も遠いところにいる俗物にすぎないことを、とくに自覚していたからである。わたくしはしばしば「心ある人」づらぶらさげて

歩き廻り、伊東の詩を読むたびに、ヒヤリとし、あるいはゲツソリし、伊東がすてにこの世にいないことを思い出して、すこしホッとし、また性こりもなく「心ある人」つらさをふらさげている。K氏は同じはがきに「杉本秀太郎君の友人ではないか」と想像された。わたくしはK氏のことばのすべてを否定する返事をしか書けなかつた。

ところでK氏のはがきではじめて知った杉本氏が勤務先を同じくする人であることをそれからまもなく知り、言葉さかわすようになり、その人が『伊東静雄全集』纂輯にばかりがあることもわかり、やがて、その「伊東静雄論」を恵まれることになった。またそののち氏の筆寫された「富士正晴氏の「伊東静雄論」を借覽すること」ができた。K氏にも多年にわたる研究のあることをきいたが、これは見えないでいる。

富士 杉本兩氏の論を讀めば、すでに拙文を提出する理由はほとんど消滅する。おのれの愚劣を外化することによって、ややそこから解放されたい、というのが、わずかに残された理由のすべてである。

(一九六五 一・三〇)

標 齋 讀 後 (一) 辰 田 意 雄

夜の果ての旅 — 訳者生田耕作氏に—

\* 仏国セリマ著 生田耕作 大槻鉄男訳 『世界の文学』42 昭和三

十九年十月 中央公論社刊 解説 生田耕作

できるだけゆっくり読んできましたが、『夜の果ての旅』はついに終りました。

遠く 曳ぎ船が汽笛を鳴らした、その呼び声は橋を越え、つきつきと橋弧を 水門  
を、橋を越え 遠く さらに遠く、のびてゆく……それは自分のもとへ呼び寄せて  
いた、河のすべての佐馬船を 一隻のこらす さらに銜全体を、空を 野原を、そ  
して僕たちを すべてを それはさらっていった。セリマ河をも、すべてを とう  
おしまいた。

この幽暗なドラマが、無に吸いこまれてゆくひびきのように、痛切です。

これは それについて語ることを拒んでいるような作品です。印象を問われても  
かに読んでくれ、と答えるのがいちばんいいように思われます。原文のもっているの  
であろうそのような態度が、たまた読者に伝わるのは 訳者の苦心が見事に效を奏した  
ところであろうかと 察します。さすればもはや書かすおめることは無駄であらわけて  
すが 次のような理由で、むしろ感想をのべ、示教を仰ぎたくぞんじます。



天国篇のなし神曲。『夜の果ての旅』を読み了ったとき、ふいに落ちてきたのが、このことばです。解説に「現代の地獄篇」の語がみえます。この二つの語のさすところが同じものであるのかどうか。それをうかがいたいと思うのです。

現実よりも鮮明なイメージが、次から次へはてしなく現れ、みるみるうちに消えてゆく。エレベーターで底のないビルを落下してゆき、その間に、皮膚も、肉も、骨も飛び散ってしまうような喪失感。地獄篇を読み進むとき、つねに内部におこる感じと、たいへんよく似ています。

少年のころ、神曲を読んで、ダンテかなせ天国篇を書いたのか、不思議に思いました。蛇足だと思つたのです。源信の往生要集についても、同様の感想をもつたことを覚えています。今では、そうは思いません。地獄篇の精彩は、天国篇からさしてくる逆光に照らされて生じたもの。地獄篇はその細部にいたるまで天国篇に支えられ、支える天国篇の聖固が、支えられる地獄篇を尖鋭にしているのだ、と思うのです。ダンテは天国篇を書いたために、やむをえず、地獄篇から手をつけたのでしよう。彫刻家が一つの像を刻むとき、おのれの欲する形からいちばん遠い、偶然があたえた大理石塊の表面を、うちくたくことから着手するほかないように、地獄篇は、いわば、ダンテという彫刻家がけすりと、ついでに、像の外がわに像とわかちがたく結びついていた大理石片です。大理石片は、像のネガテイヴといつてもいいでしょう。ただ、神曲は文学であつて彫刻ではな

いため、彫刻ならば削りおとした大理石片は像が完成したとき掃きすててしまふのに、神曲では地獄篇は掃きすてることができないのだ、と思います。

『夜の果ての旅』は 最初から天国篇を拒否しています。セリー又は大理石をうちくだいてゆきますが、かれの掘り出すべき像はないのです。かれのノミで削りとられた大理石片は、キラキラ輝きながら、ただ落下するばかりで、それを支える大地も消失してゐるため、石片は山をも成さず、もとの大理石塊より半大を時間と空間とに、流れ去り横散してゆくように思われます。

解説に引かれたアンドレ・ジイドの「セリー又は描くのは現実ではない。現実が生み出す幻覚である」ということは、「幻覚」がどういふことをいつてゐるのか、は「きりとはのみこめないのです。わたくしには、ある意味では、セリー又はほど現代の現実を的確に描いたとは稀なのではないかと思ふのです。現代は「天国篇」を断念した時代です。現代のとりとめなさは「天国」を信じないと、ころに原因があるように思われます。天国のないところには地獄もないのであつて、現代は「地獄」でもありません。「地獄」では価値の序列は厳密で、「天国」のそれに正確に對應してゐます。現代には価値の序列が見失われています。強いていへば、数量か価値なのです。

セリー又は、数量がただ一つの価値となりてゐる現代といふこのトリトメもない世界を、驚くべき精緻さで描いてゐるように思われます。解説にみえるかれの作品の「醜惡」と「単純」とは、たぶんこの「現代」とびつたり密着してゐるところから生じた

のかと思います。

ただ、かれが現代そのものでないのは、現代が「天国」を断念しているのに対し、かれは拒否している点にあろうかと察します。断念は信じていることを知らぬと、そこから出る態度ですが、拒否は信じてしかも遠ざけるのです。

現代が「地獄」してしないとりとめ世界でありながら、これを精確に描いた『夜の果ての旅』がなほ「地獄篇」たりうるとすれば、それは、セリーヌが断乎として「天国」を拒否しているためでありましよう。しかもダンテの地獄篇のように立体的でなく、平面的にひろがりの又の感ぜられるのは、やはり「天国篇」がないからであらうと推します。

地獄絵巻はかけても、地獄そのものを再現できないところに、『夜の果ての旅』の位置があり、ダンテならぬセリーヌの悲劇があるやてしようか。これはかれのせいであらう。これは、かれがそこに生きなければならなかつた現代の悲劇です。現代には喜劇はなりたないのかもしれません。

解説に「フランス文学の系列中にこの作品の位置づけを試みることは不可能」と見え、また、セリーヌは、かなりボードレールに近い場所にいるのでありますまいか。両者がひどく違って見えるのは、二つの時代がすっかり変わったところに、すなわち、ボードレールの時代のブルジョワはまだとしかくも神を信じていたが現代のそれは、もう全く信じていないところにあるのではないでしようか。

(一九六四—三三)

附 記

1 天国は、みずからのために存在する必要はない。地獄をほらねばならぬ人間のために、その存在が必要なのである。

2 二十世紀がとりとめのない時代となつて、一つの要因として、極めて不完全な人間が、完全であるかのようにうぬぼれてゐることをあげることができる。セリーヌが夜の眠ての旅にえかく醜態は、現代の人間のうぬぼれと、うぬぼれをうぬぼれと知らぬ無智と、であるように察せられる。セリーヌがダンテに似てゐるのはそこだ。といつて今日、不完全な人間に対して、完全な神をもち出すわけにはゆかぬ。それをどうすればよいか。セリーヌは逃避する。逃避という場面では、ほとんど老子と手をにぎつてゐる。逃避がぶつかると壁から、老子は消滅するが、セリーヌは消滅できぬ。

(一九六四—二二二)

V I K I N G に発表された 広 瀬 正 年 小 詩 集 一 著者にリ

\* Viking Series XII 一九六一年十月 V I K I N G C L U B 刊 序文・井

口 浩 著者 あとがき 富士正晴

「小詩集」という題名のつづまにまが、心をうたれました。

「初めてくる雪は」から読みはじめましたが、見かけは極めて沈静な一行一行が、底の知れない暗い苦惱からはけしく突き出された頂であることが感ぜられ、いそいで読み



進むことはできませんでした。

先日 ある百貨店で「鐵齋展」というのがあって、まいいりました。展示された繪はこれが果して謂うところの人のものかとかとためらわれる作が多く、失望し乍ら見てゆきますと、中にひとつ「冬雪雪景」と題するのがある、心をひきました。雪の降りだした夜を、簾の子屋根の下で、三人の隠者風の男が、火を焚いて休んでいる。そんな圖柄だったかとおもいます。会場で、いいなと思った、この繪が、あとまで奇妙に心にひっかかっている。題字がやや柔媚だったためか、と考えますが、やはり落ちつきません。ところが、あなたの一連の雪の詩を読んで、いろいろうちに、ふと、その繪のことが想い起これた。ただちに、あれは本当ではないと断定し、断定してから、そのいさぎよさにかえて驚きました。鉄齋についてはほとんど何の知識もなかったが、あの繪がじじつかれのものかどうか、そうたとして、いつ、いかなる状態で、描かれたか、すべて知らないので、批評家めいた言いくさは慎まねばなりません。一亨受者の感想として、いつわらぬところ、あれは画人が雪を描いていて、雪が画人に描かせたものではない、と感ぜられたのです。

詩人が雪をうたうのは、じじは雪が詩人をつきうごかし、かれの手にペンをとらせ、ペンの先から紙上に降りそそぐので、詩人が任意にペンをとって雪を描いたりするのではない。あなたの詩が、そう言っているように、感ぜられます。あなたという夜のなごみ、雪がみすからばげしく舞いおり、音なくふり積む……鉄齋は詩人であり、その繪

はみれの詩であつたのでしよう。かれもまたおのれの夜にふりそそぐ雪につき動かされる  
るとき、やむなく紙上に冬夜雪景を吐き出さずにはいられなかつたはずです。もしあの  
絵が鉄斎のものならば、それを描いたときのかれは、生むべき時の熟さぬ詩を放り出し  
たのでしようか。あるいは鉄斎の思いも及ばぬ雪が、かれののち二十年の日本の詩にふ  
りつもつていたのでしようか。

第二部の諸篇を読みて、ここには 第一部のそれにあくなら辱しうされた「雪」  
の寺が、かき消されたように無くなっていくことに気づきました。けれども雪は 第二  
部において、第一部よりもさらに玄く、深く、ふりつもつていくように感ぜられます。  
雪をその中に降りそそがせる、あなたを灰色の空も。そうして「或る日に」さした「雪  
のかり」が、その日よりもさらに複雑に微妙に、あなたを夜の夜を吸収し「又 或る日に  
予告した「きらめき」となって、そこに来る小犬を、馬を、人を、照らしている、信  
ぜられます。」(一九六四年十一月十五日)

井口浩詩集 雪 雨

一著者に

\* Viking Series II 昭和三十年四月 - 六月社刊 跋・高士正晴

詩集『雷雨』一通り読み了り、しばらく離れてまた読み。その後、一日に二三篇十  
つ読んできました。そのたびに新たに開けてくるものがあります。こうして拡がってゆ  
く視野が、どのような全体を形づくることになるのか、まったく鬼当もつきませんが、

こゝにはいまの印象を申しのべようとぞんじます。

二月十日 富士正時に 雪がやみに降る。山頂は白く、

しっとりとして浮ぶ白雪に 遠かな山嶺の松林に消え残る雪

暗ればれと十字の列をつくつて 野はしみじみと暖かい

枝々バウす黄の小鳥がうち集い 青草原の上 濃やかな憧憬の羽を慄わせて

雪声高く響る声にひびかす 雪雀のむねか青空に撒かれる。

昔戸の小川はきらきら流れ 滑らかに曲った石垣 妹よ、

白り椿が静かに落ち 私はお前を忘れよう。

はやい藪に光って廻る 落葉松林に風がうなり

私は見知らぬ妹を訪ねもとめる 墓所は眠りに落ちている。

どの墓石もとりかこむ

柔らかな梅の白

藪かげにとぶ鶯

竹林の底に漂う静かな青い流れ

竹けめいめいの影をうつし、  
まつわる梅の花の匂い、

林の中に無心を妹の朧かな笑し音がする。

初めはそれほど強く印象されませんでした。が、読み返すうちに、前詩のすべてに通ずる特徴を、ここでははかなりあらわに示して、いわば鍵のような重要さをもつ作品だと考えられます。

「見知らぬ妹」の語は奇異です。妹を見知らぬとは、どういうことであろうか。まゝ生れて来ぬむとか。現に存しながら「私」には見知ることのかなわぬ事情にあるむとかいすれにしても、未夫には見知りうる可能性がありながら、いまは見知らぬむと、どういふところの語法からいって自然なように思われます。けれども作中の「見知らぬ妹」は、もつと違った意味を有身しているように感ぜられます。果して次のスタンザで「お前を忘れよう」という語が現われます。過去のひとに對するようなことはつきです。あるいは生れる前に、あるいは見知る前に、断念しようとするのでしようか。どちらとも取れそうですが、すでに「私」の心に「妹」として存在したところからすれば、過去のひとです。この妹が「翡翠」詩の妹と同じひとならば、はっきり過去のひとです。「妹」は未夫と過去とにたちきられ、現在の「私」に對して遮断されている。にせいかかわらず、



「和」が「忘れよう」と決意したとき「林の中」の「笑い声」となつて現在する。

「雷雨」のほとんどすべての作品には「相反する両極」「消え残る雪」と「緑の葉の花」とのようなそれがあつて、二つを結ぼうとするディアレクティクの放出するエネルギーが詩に結晶してゐるやうに感ぜられます。各詩における両極はさまざまで、そのディアレクティクも一様ではありませんが、成立した作品のおおむねが、ある明るさと熱とを帯びるものは、玄瀬正年氏が「エ君に」でいふじくも歌われた「最後に来る雪を受したあなた」であることによるのでしようか。

玄瀬氏のあの詩では「雪」において交叉する「あなた」と「わたし」は、そこから相反する方向にむかう二つの弧のようにも見えなくはありませんが、よく読んでみると、球体をめぐる長い楕円の両端が「雪」の位置で結ばれてゐるものであつて、結ぶことによつて意識せられる両端は、球体の反対側では一つであるといふことがわかります。この楕円の抱く球体が何であるか、またわたくしにはよくつかぬませんが、あなたにも玄瀬氏にもあつたといふ詩の放棄が、それと深くかかわるやうに感ぜられます。

くもり日

苦い煙草をすてよう

あやめの花は凋おとれてしまい、  
ゆううつな小さい波が  
苗代のふるえる苗に笑いかけては

か存しそうに黙ってしまふ、

うつろをそれらのからだを、

吹き通す風が、いつまでし

平野の空に唸っている。

小鳥も、犬もいない、

つまらな、苦い、煙草をすてよう、

兄妹は別れ別れになつてしまひ、  
お互いにこたわりもしない、  
のんきなくもしり日、  
もやしやと雲を被いで  
尖った山の頭  
風は勝手に遊び暮す。

ここでは、あの複雑なディアレクティクは深く内面にかくされて、極めて単純化されたことばが、自然とよりほかにはいいようのないすがたでならび、それらが、小高い丘からながめた田園のように、ややゆううつに、展けていきます。天衣無縫という語は、まさにこのような作品のためにこそ存するのであらうと思われれます。この詩はV1H1 N G時代の「対岸」と対峙しているように察せられます。

対 岸

雪雀の巣はたしかに対岸にあるのだ

全粉を身にまとい

天上?——に羽ばたき羽ばたき

時にねむけをさそうその鳴き声  
またしても茶色の翼はびゅんびゅん羽ばたき

友 その時下の川原で見上げる種を呪のよい

沙と枯れ葦の対岸に

なれたしくさでほつと息をつくような降

下

種な児だけのよい友ではない

おれも雪雀は可愛らしい友

しかし又の日遠く迂回して対岸に渡り

歩む時

朕く伏す枯れ菅 散乱する芥 齧る地下

足袋

農夫ではなく 労働者の父や母や嫁が耕

した野菜畑

岸辺の葦のその残骸をさくさくと踏み

もとより雪雀の巣がみつかるうさぎもない

だがこの迂回と散策に

吹きわたる風に微かな血の色があるよう

に感じる

ホドレールが歌うたあのすべてを染め

てひろがる血潮の色が

いなもつとその血はきれきれに

風に運はれ運はれる断続的な血をうた

これは「くもり日」ほど西極がかくされてはいない いや反対に西極があらわにされた作といつてきでしよう。しかも、二つの詩のかくしているものとあらわしているものとミバランスに一種の相似が感ぜられます。

僕はあまえを死からしぎ取りに来た

あの「足踏み水車」の「行こそ、おそらくあなたか詩を放棄し、また詩に向われた唯

一の動機であらうかと、推察します。わたくしの弟は邑久の光明園の医師です。かれの





あとがき

\* 本号には、杉本秀太郎へすぎもと  
ひてたろう、原田慶へはらだ めぐみ、  
両氏の寄稿をえた。杉本氏の訳稿は、氏  
が結婚を記念して、一九五九年二月末日  
完成せられたもので、凡て十章、二百二  
枚（別に訳註十五枚）のもの。今回はプ  
ロローグと第一章のみになつたが、次回  
はさらに多く掲載できるだろう。原田慶  
氏はまづたくの新人である。  
\* 年に二回は発行したいと努力したが  
やはり一回しか出せないことはやや残念  
である。本号も半分位は一月にすてに印  
刷していたが、全評がそろふのに半年か  
かった。その間にすてに印刷したものを  
破棄したい衝動にかられることがしばし  
はあった。だが破棄したところで、わた

しの、書き、印刷した、行爲が消滅する  
わけでもない。破棄するといふ行爲が加  
わるだけだ。おのれと、おのれの作り出  
すものの醜惡は、はじめから知れている。  
しかも、何をかくし、何をあらわそうと  
するか。香具師のアブラ売りの口上に  
出てくるガマのように、おのれの醜惡に  
直面して汗を流す以外に、おのれにとつ  
て物を書くといふわざは、意味がない。  
すくなくとも、わたくしにとつてはそう  
だ。そう思いかえして破棄することはさ  
けた。

\* 毎号のことながら誤記が多すぎる。  
これはまづたくわたくしの責任である。  
申訳ないが、それぞれ筆者がそれぞれ  
の文を、新たにまづめられる折の訂正に  
期待したい。  
\* 黙っていた日がつづく。(意)

方 向  
二

1965年8月20日

方 向 社

京都市西陣局区内下長者  
町通千水西入 妙徳寺  
¥300, ¥50

\*

出 版 目 録

+ 中 新 敬 +

徒然草の成立に関する研究 — 兼好の伝記考証を  
中心として — 国文学 品切

+ 志 樹 逸 馬 +

志樹逸馬詩集 品切

+ 原 田 憲 雄 +

幽 歌 集 中国詩選 品切

夜 の 歌 詩 集 品切

墳 墓 歌 集 品切

平 松 集 中国詩選 品切

無花果の骨に 詩 集

夢 鏡 集 中国詩選

\* 原 田 千 英 \*

桃 栗 集 歌 集

\* 原 田 高 雄 \*

論 文 集 (I) 医学研究 品切

録 休 外 路 歌 集

\*

アラン 文学 論 集 杉木 大 郎 白水社

王 維 (漢詩大系10) 小林 大 市郎 集英社

王 維 (漢詩大系11) 原田 憲 雄 集英社

顧 貞 歌 集 原田 高 雄 自画像

ら い に つ い て 原田 高 雄 光明園

\*